
Exorcist ~ 悪魔と戦う者 ~

BRISINGR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Exorcist～悪魔と戦う者～

【ISBN】

N7150S

【作者名】

B R I S I N G R

【あらすじ】

ある日、俺・那雲勝羅の部屋で倒れていた少女。その少女・ニコは自分は“天使”だと言った。これは勝羅とニコが様々な世界を渡り歩く話。

『とある魔術の禁書目録』の世界で起こる騒乱の数々。大能力者（レベル4）の下剋上、暗部の襲撃、十字教が使う『天使の力』とは相反する力を持つ逆十字教の逆襲、墮ちた神裂。それぞれが為す思惑とは…？『禁書目録・始動編』を掲載中。

第1話　出会い（前書き）

初投稿2日目にして2作目の投稿！

基本はいつもメインでやるつもりで悪しからず（^_^；

第1話 出会い

ここは伏獣成市。

この町は他の町とは比べものにならないくらい大きく人口も多い。
第2の県庁とも呼ばれている。

そして、この町に住んでいる俺、那雲勝羅は市立伏獣成中央高校に
通う高校2年生。

今は幼なじみの月島奈緒と帰宅途中である。

「今日も1日終わったー」

「カツちゃんは寝てばっかじやん。今日だけで何回注意されたのよ
？」

「ええと……10回？」

「ぎーんねん。正解は11回でした」

「そりだつたか？」

「そうよ。注意されすぎ」

俺は大きく欠伸をしながら帰路を歩く。今日は特別なことは何もなく、昨日と変わらない日々を繰り返している。

帰つてもアラロココをやつたり読書でラノベを読み漁るくらいだ
らいい。

「そんな」と考へていたら、隣を歩いていた奈緒が俺の顔を覗き込んだ。

「ヒーリング、」のあと暇?」

「ん?まあ、暇だけ?……また作った菓子の毒味か?」

「ど、毒味じゃないって。毎回言つてゐるでしょ。試食よ、試食」

「そんなこと言つて、毎回失敗ばかりの菓子を喰わせるじゃないか」

「練習が足りないだけよ。たくさん練習すればもっと上手くなるもん」

「だったら、練習してくれ」

ま、奈緒が作ったお菓子は全部食べてんだけだな。…………だつて、残すと目を涙で潤ませてこつちを見てくるんだぜ?これに耐えられるはずがないだろ?小さい頃に、そういうことがわからなくて「マズい、最悪」と言つて、一つしか食べなかつたときは大泣きされたこともある。あれはマジで焦つた。何で泣いてるのかわからないんだもん。

「あとで、そつちに行くからね。私のお菓子を食べてヒックリ仰天させてやるんだから」

「ヒックリ仰天はいいが昇天しないからこに留めてくれよ」

「……ふーんだ」

「こんな感じで会話が終わる頃には、勝羅と奈緒は「『ただいまー』」「

と家のドアを開けた。俗に言つ幼なじみの家は隣同士とこいつつである。

side天界

この世界に住んでいるのは胸中に純白の翼を持つた天使だけ。

この世界には3つの大きな自然で成り立つてゐる。世界の隅々まで這つてゐると思われる薄暗い黒い雲『地雲』^{アンタークラウド}。『地雲』に刺さるよう立つてゐる大小様々でコマの形をした台地。台地同士を繋げるために石橋がいくつも架けてある。そして、空には『地雲』とは真逆で夜明けの陽射しが照らされてゐるように淡く光る雲『天雲』^{アンクラウド}。

この世界について簡単に説明したところで、『』で自己紹介。私の名前は『』。本当はもつと長いんだけど、面倒なので省略。

「また失敗したやつたな…………」

今は天界学術院の中等部からの帰宅途中で、石橋を渡りながら私はため息をついていた。

「『』のままだと『魔法』で落第だよ…………」

私が通う天界学術院の『時間割り（カリキュラム）』は、大きく3つ『学問』と『体術』と『魔法』に分類できて、それぞれで単位を取らなきやいけないんだけど。

私は『魔法』ができない。

苦手とかそういう問題じゃなく不可能。

『魔法』は背中の両翼を使つ。まず、右翼で魔力を生成して、左翼で生成した魔力を元に術式を構成する。

でも、私には『あの事件』のせいで、その左翼がない。

右翼で魔力を生成しても、左翼がないために行き場を失つた魔力が暴走する。

だから『魔法』を使えない私は単位取得がかなり危うい。まあ『学問』と『体術』は余裕で取れてる。2つとも中等部1位だし……『魔法』は最下位だけだ。

「うん？」

ふと私の視界の端で、赤ちゃんが映つた。背中には小さな翼がかわいらしく、台地の上に生えた草原をよちよちとハイハイする姿は私の胸を射止めたのかもしれない。

かもしれない、というのは赤ちゃんがハイハイしている場所が台地の崖つぶちだから。

天使の赤ちゃんは、好奇心からか台地の上から下を覗きこんでいた。

各台地の周りには落下防止のフェンスがあるが赤ちゃんの丈には合つてないわけなく、簡単に下から通り抜けられる。下に広がるのは薄暗い『地雲』。落ちたりしたら大変なことになってしまつ。

『地雲』に落ちたら天界から下界に墮ちるという都市伝説がある。

「わあー」

さらに、身を乗り出す赤ちゃん。
そのまま、身体が傾いて。

「あ、危ない！」

私は気付いたときには走っていた。

距離は約20? 橋をすくに渡り切り、ランプを飛び起える。

「カナリア！ どこなの！」

女性の叫ぶ声が聞こえた。
もしかしたら、この赤ちゃんのお母さんなのかもしれない。

声の大きさからかなり離れているから、ひちに呼んでる間に赤ちゃんは『地雲』に落ちてしまつだらつ。

崖に着いた私は精一杯に手を伸ばすが、赤ちゃんには届かない。その間も落ちていく。赤ちゃんの顔が恐怖で歪んでいた。今にも泣きそうな状態。幼少時の天使はでは自分の羽で飛ぶことはできない。なら助ける方法はただ一つ。

私は崖から飛び降りた。

崖から勢いよく飛び降りた私は『体術』の基礎である段飛びをした。段飛びは、簡単に言つてしまえば、2段階ジャンプのようなもの。普

通は上方向にするものを私は下方向に繰り返す。

段飛びを繰り返すことで私の落ちる速度が上がる。「オオオオオオ！！と耳元で空気が唸る。

すぐに、赤ちゃんに追いつくことができた。

「もう大丈夫だからね」

私は赤ちゃんの手を掴むと、自分の方に引き上げて抱きしめる。

問題はここから、どうせここから上に戻るかってことだけね。

私は左翼がないから飛ぶことはできない。

だから、私は赤ちゃんを両手に持つと、態勢が悪い中で上に勢いよく放り投げた。放り投げられた赤ちゃんは真っ直ぐ飛んでいき。ボスツと台地にギリギリ乗つた。

「よかつた…………」

私は赤ちゃんの無事に安堵した。

だが、下に顔を向けてみれば、薄暗い『地雲』が見える。

「このまま、あの暗い雲に入っちゃうのかな…………」

そして、私の身体は薄暗い雲に吸い込まれていった。

俺は家に帰ると、母さんが出てきた。

「勝羅、お帰りなさい」

「ただいま。あとで、奈緒が菓子持つてくるから。出迎えよひじへ
「あら～奈緒ちゃんまた来るのね。今度は何を作つてくれるのかしら
？」

「知らね

そう言つと、階段を上がつて、自分の部屋に向かつ。

「わひと……奈緒が来るまで、一眠りすつかな。最低でも一時間は
寝れるだろつ……うん?」

部屋のドアを開けると、意味不明・理解不能な物体が転がつていた。
純白と言つてもいいくらいこの布と金色の……髪?

「何だこりゃ?」

「へ?」

俺はゆづくつその物体に近づく。

よく見ると、物体は人だつた。しかも、女。と言つても、明らかに
俺より身長は低い。多分、妹の沙菜さなと同じくらいの身長だろつ。

つていうか、なぜ俺の部屋で人が倒れてるんだ?
といあえず、起こさないとな。

「お~い、お~い。…………起きるおおおーーー！」

指で頭をつついてみたり耳元で声を出してみるが、起きる気配が全くない。

仕方ないので、俺は自分で最も最低最悪の起こし方をする。だが、他人には迷惑はかからない。

……これをここに入れて うん？ 小さいから入らないのか。いいや、無理矢理入れちゃえ。…………を最大にして…………最終確認でちゃんと入っているか確認したら、スイッチをポチッとな。

その瞬間、金髪の少女の耳に入っているイヤホンから大音量で曲が流れ始めた。

「つ起きやあああああああー！？！？！」

直後に、金髪の少女の身体がビククウツ！…と大きく震えた。
ああ、心臓に悪そุดだな。

金髪の少女は飛び起きると、耳に入っているイヤホンを乱暴に取つた。

「な、何するのよー！」

「あ、起きた？」

俺は何事もなかつたように話しかけた。この起こし方は何度見ても楽しい。

「あなた、誰？」

「いや、それはこっちのセリフだから。あんた、誰? 何で人の部屋で倒れてたんだ?」

疑問に思つてたことを矢継ぎ早に言つた。そしたら、金髪の少女は瞼を上下にパチパチすると首を回して部屋を見渡す。

「うーん?」

「俺の部屋」

金髪の少女の疑問に間髪を入れずに答える。

「ああ、やうか……『地雲』に落ちて氣絶したんだつた。へえ、こんなことに繋がつてゐるんだ……」

「訳わからぬ」と言つてないで、ちゃんと説明してもらひえるかな

「そ、そうだね。これから下界の人間に世話になるんだから、ちゃんと説明しなきやね」

「この人、何とおっしゃいました?

『下界の人間』? 『これから世話になる』?

「私は天界学術院中等部2年二〇（長いので省略） よ」

「は?」

これが、俺との会話の出会い。

第2話 天使（自称）

つまり、ソラノウソラソラ。

この金髪の少女は、この世界と違う天界という場所から来た。とい
うか落ちてきた。さらに、自分は天使（自称）で天界に戻る方法が
わからないから、方法がわかるまでの間はこの家で居候したい。

もちろん俺は、

「よし、病院に行こう」

俺は少女を病院に連れて行こうとした。
だってするでしょ？

部屋に入つたら、金髪の少女が倒れてて自分は天使で天界に戻る方
法がわからないからこの家に住むだと？

そんな漫画やアニメみたいな話があるわけがない。

「信じてくれないの？」

「誰が信じるかそんな話

「どうしても……？」

「どうしてんだ。そんな作り話をするんだつたり、さつそと本当の
話をしろつてんだよ」

「…………わかったよ。もっと現実的な話をすればいいんでしょ？？」

セツヒツヒツヒツと、金髪の少女はうへんと少し考へると口を開いた。

「私は、あなたに無理矢理この部屋に連れて来られて、私をレイ
」

「待てやゴラ！確かに、もっと現実的な話を求めだが、俺を犯罪者
に仕立てあげる話を求めてたわけじゃない！」

俺は即座に金髪の少女の話を中断させた。今、ここで言わなかつたら
いつ言つんだ？それに、金髪の少女は最後の方で何を口走つた
した？

「どうで、あなたの名前は？」

「ああ、那雲勝羅だ」

「よひしく、カツ……カツだつけ？」

「人の名前くらつは覚えろよ。何でいきなり名前の方なんだ？」

「そんなこと言つて、カツだつて私のフルネームは覚えてないでし
よ？」

それはニックネームか？

「そんなことないぞ。――――――何だつたつけ？」

「ほり、覚えてない」

「そもそも、名前が長いんだよ。覚えられつかての」

人は「れを開き直りと言ひや。

「そういうのなら、お互い様よね。これから私は貴方のことをカツと呼ぶね。貴方も私のことを「」と呼ぶこと」

一応筋は通つてゐせいで反論できなに。まあ、互いの呼び方なんてどうでもいいのだが。

俺は話題を切り換えて、この都合の悪い空氣を払拭することにした。

「」の家に住むのは、本氣で言つて居るのか？」

「本氣も何もないの。天界に戻るための方法が見つかないと、どうすることもできないんだから。それとも、この痛いけな少女を外に放り捨てるの？」

「痛いけな少女つて……」

とは言え、外に放り捨てるのは後味が悪い。でも、ここに住むとなるとそれなりの理由がなくぢやな。

「それで、天使（自称）の」を

「（自称）はいらない。まだ信じてないんだね。わかつた、なら証拠を見せて上げる」

そつ言つと、」はぐくとその場で身体を半回転させた。

何がしたいんだ？

「ほり、この翼が何よりの証拠よ」

「翼？ そんなもんどこにあるんだ？」

「え？」

「この背中には何もなかつた。

小さな背中があるだけで、他に何もなかつた。強いて言えば、服があるだけだろうか。

「う、嘘でしょ！？」

二コが手を後ろに回して、背中をぺたぺたと触る。

「え？ 何でないの！？ ちょっと、カツも見てよ！」

そう言われてもないものはない。

その時、ピンポンとチャイムが鳴った。奈緒か。予想より早いな。

……今、来るのはマズいだる。

仕方ない、部屋に上げないよりリビングで応対するか。

「用事があるから、一旦出ていく。いいか、部屋から出るなよ。お前が俺以外の人に見つかったら大変だからな」

俺は部屋のドアの取つてを握つて言った。

「へ、うん……」

「『はしおほんとした声で答えた。

1時間後

予想通りの味だった。

奈緒には悪いけど、人に食べさせるものではない。俺は十数年間食べてきた耐性があるから大丈夫だけどな。

最近は、未元物質^{ダークマター}から暗黒物質^{ダークマター}に成長した。

『この世にない物質』から『この世にある物質』になつたという意味だ。

十数年かけてこれでは先が思いやられる。

わて、『はおとなしくしてたかな？

俺は部屋のドアを開けた。

「何をやっている？」

「ほえ？」

部屋にいた二ノは本棚から引っ張り出したと思われる漫画をパラパラと読んでいた。

アニメや漫画みたいに主人がいない間に部屋がぐちゃぐちゃになつていることはなかつた。
これはこれで一安心。

さて、本題だ。

「100歩譲つて、二口を天使だとしゆつ」

「本当に天使になんだけど」

『よつやく、見つけたぞ、二口』

「ひいおじい様！」

いきなり天井から声が聞こえてきた。

俺は驚いて首を上に向けるが、ただ天井が見えるだけだった。

俺の部屋で超常現象が起きている……！

二口がひいおじい様と反応しているから少なくとも訳のわからないやつではないな。

それにしても、二口の言つたことは本当にことだつたんだな……。
あとで謝つとかないと。

「ひいおじい様、私を捜しに来てくれたのですか？」

『そりじゃ。お前さんが地雲に落ちたと聞いてな。急いで界視鏡でアラウンドミラー^{アラウンドミラー}で捜したのだ。今は界視鏡ごしに話している』

「それでは、私は天界に戻れるのですね？」

「二ノ口が嬉しそうに言った。二ノ口が見つけられたのなら、天界に帰ることになる。」

『そのことなのじゃが……残念ながら、天界に帰すことはできないのだ』

「え……！」

「マジかよ……。

「二ノ口よ。お前さんがこの世界に来てからどれくらいの時間が経つ？」

「えっと……」

「約2時間くらいだ」

俺が二ノ口の代わりに答えた。

俺が帰ってきたのは17時くらいで今は19時過ぎだ。

『二ノ口の隣にいるのは、人間じゃな？』

少しイライラとする言い方だな。

「やつです。この世界に来た私を助けてくれました」

『おお、やうかそつか。二ノ口が助けてくれた礼はあとでせせらじもうとしよう。それで、この世界に来て2時間ところの本當か？』

「多分それくらいです。何か問題が　　あ

二口は途中で言つのを止めると、いきなり俺に飛びついて、ものす
「」い勢いで肩をガクガク揺るし始めた。

「ねえ、今何か起こつてないわけ！？ねえ！？」

「お……　おい、ちょっと待てって……」

なんだか知らないけど、俺の身体を二口は残像を残すよつた速度で
揺すつてくる。

早く止めないと、俺の肩が外れ　　（「キュー」）　　両肩が外
れただじゃないか。

「痛アツ！？」

「あ、ゴメンゴメン」

（「キュー」）

外れた肩に気付いた二口は無理矢理戻された。この痛みも尋常では
ない。

ひい爺さんの声が二口を落ち着かせる。

二口は言われた通り俺から離れた。

『人間、これを説明する前に一つ聞かせて欲しい。周りで空間の歪
み　いや、異常現象は発生していないか？』

「唐突になんだよ。そんなもん起きてねえよ。今日も至つて普通の
1日だ」

『それを聞いて安心じゃ。では、説明を始めるとじよつ
『』

「口のひい爺さんからの説明はいつだつた。一口も途中から説明に
加わつた。

まず、天使というのは力　まあ、存在の力みたいなのが大きすぎ
て、天界のような上界以外の下界、つまり人間界はその1つにその
まま現れることができないらしい。もし、そのまま現れようとすれ
ばその下界全体に『圧力』をかけられ、その状態が30分も続けば
『世界の崩壊』が始まつてしまつ。

さて、ここで問題に上るのが、一口の存在だ。

一口はいつやつて現実にいる。

2時間以上がたつた今、30分で起きる『世界の崩壊』が始まつて
いると考えるべきなのだが、

「何も起きてないよな」

俺の見た限りではそんな異常現象みたいなことは起きていない。も
しかしたら、世界の隅つこで起きているかもしけないけど『世界の
崩壊』は原因である一口の周りから始まるらしいからこの説は没。

ちなみに、この日常から掛け離れた説明を受けている間は俺は黙つ
て聞いていた。天使だの『世界の崩壊』だの言われても驚かない。
世の中は意外と中二病で満ちているのだ、と俺は世界に対する認識
を改めている。

話を戻すが、じゃあ、なぜ『いつも二二コが現実にいるの』『世界の崩壊』が始まらないのか? の前に、

「何でそんな大事なことを忘れてんだあ――――」

俺の怒叫びに二二コが身体を小さくする。

今は起こっていないからいいけど、下手したらこの世界は二二コのせいで崩壊していたかもしれないのだから。

「『メンツ』って言つてるじゃない。そんなに怒りなくて……」

若干、二二コが涙目だ。

少し怒りすぎたかな、少し反省しようと思つたが、事の重大さを見ても怒り足りないことがあっても怒りすぎはないだらうと思つた。

とは言つても、女性の涙は見たくないので、怒るのは止めた。

「それで、何でこの世界に二二コがいるにも関わらず『世界の崩壊』が始まらないわけ?」

『私でも信じられないような話なのだが、今の二二コは天使の「圧力」を抑えるほどの「殻」の中にいるのだ』

「は?『殻』?」

俺は言葉の意味がわからない。

二二コもイマイチわからないような顔をしている。

『そこにいる人間に解りやすく説明するとなると……常時核爆発を起こしている二口に絶対防御の核シェルターの中にいるよつなもの、と言えばわかるじゃろうか?』

自分の曾孫を原爆に例えんじゃないよ。
だけど、なんとなくわかつた。

つまり、今の二口の身体は天使の『圧力』を抑えるようになつているのだ。だから、2時間以上経つた今でも『世界の崩壊』が起こらない。

「じゃあ、私の翼がないのはその『殻』といつやつせいなのですか?」

『そうじやな。今の二口は天使級の力を持つた人間の状態つてところじやる?』

「では、私が天界に戻れないのはどうしてなのですか?」

二口が見えないひい爺さんに言つ。

これが最大の点だ。

だけど、今までの説明から見るに、二口は絶対に天界に戻れないのだろうと思つた。

今の二口に天界に帰る方法があるのなら、見つけたときにさつさと帰してしまつだろう。

『世界の崩壊』というハイリスク　これは天界が下界の崩壊を気にしている話だ。気にしていなかつたら放置だらう　を承知で二口を下界に置いとくとは思えない。

わざわざ人間の俺にまで説明したんだから、大層な理由だと思う。

『原因はわからないが「殻」が二コの身体や魂と密接に繋がつてしまい、取り外せなくなってしまったのだ。今、無理に「殻」を外すと、二コ自身の魂や身体まで取り除く危険性があるので。今は二コを天界に帰す方法を探しているところじゃ』

つまり、今の二コの状態はデリケートだから迂闊に手を出せないってことか。

「ど、どひして……ひひして！？私ばかりこんな目に合ひの……」

二コの目に涙が浮かぶ。

それはそうだろう。見た目からして13～14歳の少女が故郷に帰れないのだから。

親にも学校の友達にも会えない。

1人だけ全く知らない世界で1人ぼっち。辛いことこの上ないだろう。

俺はボロボロ涙を流し始めた二コの頭の上にポンと手を置いた。

「1人じゃねえだろ」

「え……？」

「俺がいる。俺だけじゃない。」の家には沙菜や母さんや父さんだつていて。世界にただ1人ぼっちみたいな言い方をするんじゃねえ！」

俺は勢いに任せて言葉を一いつ口ごとつけた。一いつ口の心に響く言葉が1つでもあつたらいいと思しながら。

「このひい爺さんだつて言つてたじやないか。一いつ口を天界に帰す方法を探してゐるつて。今は帰る方法が全部なくなつたわけじやない。いくつもある方法の中の一つが消えただけだ。まだ希望が潰えたわけじやない。泣くのは全ての希望が消えたときにしろ。まだ泣くのは早いぞ」

いつのまにか一いつ口の涙は止まっていた。
ポカンと口を開けて俺を見ている。だが、その表情はすぐに笑顔に戻つた。

それは、どびつきりの笑顔だつたと俺は記憶している。

その後、ひい爺さんの情報操作のおかげで一いつ口は俺の家に居候することになつた。もちろん、ひい爺さんが一いつ口を帰す方法を天界を天界で探すまでの間だ。

第2話 天使（自称）（後書き）

急展開スイマセン。

作者が早く本編に行きたいもので（^_^；

構成がなってませんね。

これは作者の未熟さっていうことでしよう。

プロローグ終わったら、人物紹介と設定について書きたいと思います。

第1話 テスト開始（前書き）

馴文ですね。

申し訳ありません。

第1話 テスト開始

時は午後9時、場所は俺の部屋。

『明日、人間を『テスト』する』

二口のひい爺さんがいきなり言い出した。

俺は、何を言つてんの?、とひい爺さんを見た。見たと言つても、天井を見上げただけだ。

ちなみに、二口は部屋にいない。あの後、妹の沙菜さなと風呂に入りに行つたのだ。

ひい爺さんの情報操作のおかげで、二口はこの家にホームステイする留学生ということになった。もちろん、通う学校は俺と同じ伏獣成中央高校だ。

明日中に手続きとかして、明後日から二口は通うらしい。

あ、今はそんな話よりもひい爺さんの話だよな。

『人間、名前は?』

『そういえば言つてなかつたな。那雲勝羅なぐもかつらだ。ひい爺さんの方も名前なんだよ?』

『いや、私のことほひい爺さんのままでよい』

「相手に名乗らせといて、自分は名乗らないか?」

『別に気にすることでもなかろう。私の名前を知ったところで、ナグモの人生に何の影響もないじゃん』

教えないんかい。

それもいきなり呼び捨てかよ。

『ま、いいよ。今まで通り、ひい爺さんと呼ばせてもいいから』

『それでいいのじゃ、フォツフォツフォツ』

ひい爺さんが笑う。

イメージがサンタなんだが…………。

「それで『テスト』って何なんだよ？頭使つのはやめてくれよ。自慢じやないが、頭は良くないからな」

『そんな心配はこりないぞ。まだ内容は決めていないが、そんなに頭を使つようなものにはしないつもりじゃ』

「なら、いいけど」

俺は適当にひい爺さんの言葉を適当に聞き流しながら、3キロのダンベルを両手に持つて上げ下げする。

これは毎日の習慣でやつてる。

『お、そうだ。一口を助けてくれた礼をしないとな。何がいい？何でも言つてみよ』

「礼なんていいよ。別に助けたつて言つてもそんな大層なことではないし」

事実、俺は何もやつてない。

『私が礼をしたいのだ。さ、何でも言つてみよ』

「そう言われてもな……」

今は特に欲しいものとかはない。

だけど、こんな機会は滅多にないし、何かないかな。

『せうじゅ。ナグモの能力を開花させてやる』

「能力を開花……？」

またひい爺さんがわけのわからないことを言い始めた。

『全ての生物は色々な能力を秘めているのだ。しかし、その能力を開花させる者は極わずか。人間界でも、偶然に開花させているのは10人弱じや』

「ふうん。で、俺の能力つてのを無償で開花させてやる』

とか？」

『せうじゅとじゅな』

いよいよ中一病全開になつてきたな。
だが、断るつもりは毛頭ない。

現実世界でアニメや漫画みたいな能力が持てるのなら、断る理由はあるはずがない。

「よし、わかつた。能力の開花を頼む

その日、俺は人間界で言つ超能力者になつた。
能力は『マテリアルパズル素材構築』。

side二口

時は午後9時半。場所は客室。

この客室で和式で畳が敷かれていた。

天界には風呂やシャワーなどなかつたために、二口は沙菜と一緒に風呂に入つて使い方を教えてもらう必要があつた。

天界の普段着であつた羽衣には高度な清浄効果があり、風呂やシャワーに入る必要がなかつたからだ。

風呂上がりの二口は、客室の椅子に座つて沙菜にドライヤーで髪を乾かしてもらつていた。

「二口さんの髪キレイですね。さうさらしていくと、くせつモ一つありますね」

「あ、ありがとうございます……」

実は、二口はこんな風に同じ年くらいの女子と話すことはあまりなかつた。

二口の家系は天界の中でも有数の貴族で、天界の頂点に位置する神様という役職にいるのは曾祖父だ。

そんな曾祖父の曾孫である一「口」は、周囲の生徒から一田置かれていていた同時に、じこかよそよそしかつた。

憧れや羨望など色々な感情を持たていた。もちろん、それが嫌いなわけじやない。

しかし、たまに思つた。

皆と同じ場所に立ちたいと。

同じ場所に立つて家柄など気にしないで、分け隔てなく話して遊びたかつた。

だが、現実はそれを許さなかつた。

『あの事件』のせいで左翼を失つた一「口」は、『魔法』を使えなくなり、今では単位が満足に取れない始末。それを、両親や祖父母、周りの親戚たちも、よしとは思わないのは当たり前だつた。

家族からプレッシャーを受け、『魔法』でダメなら他の補うしかなかつた。必死こいて『学問』と『体術』を学年1位までにした。

それでも、ダメだつた。

『魔法』ができないと、そこばかり批難されてしまい、他もダメにしてしまつ。

一「口」は、一族の落ちこぼれにされてしまった。

他でどんなに頑張つても『魔法』できなくてはダメだつた。『完璧』これが一族が求めたものだつた。

その家族の中でも二「口」を見てくれたのは曾祖父だつた。

「一「口」やん……？」

沙菜が心配そう二「口」の顔を見た。

その顔には一滴の涙が流れていた。

Side勝羅

次の日。

俺は、教室の窓側の一番後ろ席で寝ていた。前で数学の授業をやつているが、気にしない。

昨日、俺は超能力者になつた。

能力の名前は『マテリアルバズル

素材構築』。

自分を中心とした半径1メートル以内の物質 原子や分子を『素材』と規定し、その『素材』を分解・増殖・構築することで別の物体をつくることができる。

例えば、ここにシャープペンシルがある。このシャープペンシルに含まれる鉄原子を『素材』と規定し、分解・増殖・構築することで刀をつくることができる。別につくる物が刀でなくてもいい。槍だ

つてつくれる。ただ、鉄原子だけでそれらをつくると、柄や鍔がない刀や槍になつてしまい、非常に持ちにくくなつてしまつ。他にも応用の仕方は色々思いついたが、後々で紹介するつも。

『起きてるか?』

「うわッ!..

突然の声に俺は驚いた声を出しちゃった。

「那雲、どうかしたのか?」

俺の奇声に教壇に立つてゐる先生がこっちを見てきた。さらに、クラス全員の視線が俺に突き刺さる。奈緒も心配そうな顔でこっちを見ていた。

そんな目で俺を見ないで!

「え、えっと……頭痛いんで、保健室行つてきます!..

俺はそつと、教室を走り出で、屋上へ向かつた。

今は授業中で当たり前なのだが、屋上には誰もいなかつた。

『いいなら誰もいなし話せるな』

『わざわざ、教室を出る必要はなかつたんじゃがな』

『それだと、ひい爺さんの声が周りに聞こえちまうだ』

『いや、ナグモの心に直接話しかければ周りには声は聞こえない』

それって、俺の心の声が全部筒抜けになるんじやないか？

バレちまへじやないか。ひい爺さんの悪口だとひい爺さんの悪口とか……。

『失礼なことを考えてないか？』

「何でもいいやしません」

『まあ、いい。それよりも昨日言つた通り《テスト》を始めるが』

そんなこと言つてたつけるか？

昨日は自分の能力で頭一杯だつたからあんまり覚えてないや。

「それで《テスト》つて何やんだよ？」

『では《テスト》の内容は　　お、ちよつと来たよつだな。門のところを見てみる』

「門のところ？」

言われて、フェンス越しに門のところを見たら、4台の黒いトラックが門から入つて来ていた。

その4台の黒いトラックは3方向に別れて、東昇降口の方に1台と西昇降口の方に1台といった具合に校舎の影に隠れて行つてしまつた。

残りの2台は俺がいる中央校舎の真下に位置する中央昇降口の前で停まつた。おそらく、東と西の昇降口に向かつたトラックもこんな感じに停まつているのだろう。

停まつた2台のトラックの運転手席側から、黒いパークーのようなものを着て頭に黒いニット帽を被つた人が降りてきた。真上から見ているために男か女かもわからないし、服も詳しいところまではわからない。

降りてきた2人の運転手は自分のトラックの荷台に回り扉をほぼ同時に開けた。

扉を開けると、運転手と同じような格好をした20人前後の人間が1つの荷台から出てきた。荷台は2つあるから、合わせて40人前後だ。

さらに、荷台から降りてきたその1人1人の手には、

「銃！？」

ドラマでよく見るようなマシンガンの形をした1メートル弱の銃が握られていた。

その40人はきちんと整然とした並びで次々に中央校舎に入つていく。

2人の運転手は全員降りていいくのを確認してから荷台の扉を閉めて、運転席に乗つた。2台のトラックは東昇降口の方へと向かつた。

「どういふことだ！？」「

『どうこういって、これが《テスト》じゃよ』

ひこ爺さんはこいつもの平淡な声で言った。

『この《テスト》の内容は、この学校に侵入したテロリストの殲滅じゃ』

「テロリストだと……？」

『もちろん、殲滅と言っても殺生するでないぞ。殺生はせずに氣絶か戦闘不能にすればいいからな』

「何でこんな」とするー。』

「ふむ。これはナグモを試す機会じゃ。だから《テスト》とこいつ形で見させてもうおひと想つてな」

「そんなことのために、学校の生徒や先生まで危険に晒すのかよ！ 沙菜だつているんだぞ……」

『そういうじゃ。それだけこの《テスト》には意味がある。ちなみに、元々とくが拒否はなじじゃよ。現実はもう《テスト》は始まっているのじゃからな』

「…………わかった」

もうじたばたなんてしてられない。絶対にテロリスト共をぶつ倒してやる。

『やる気になつたよひじやな。今からルールを説明するから、よく

聞くんだじゅうや』

俺はひい爺さんの言葉を待つた。

『ルールは4つじゃ。

1つ、能力の使用を認めるがテロリストを殺してはいけないと。
2つ、この学校にいる生徒先生全員をどんな方法を使ってでも必ず
守ること。

3つ、テロリストに殺されないこと。

4つ、『テスト』を正午までにクリアすること。
もし、この4つのどれかが破られた場合は、その時点で『テスト』
失敗じゃ』

「もし『テスト』を失敗したときせばいつするんだ？」

「やのとわせ、お前わんの存在全部を消せてしまひつもつじゅうや

つまり、死んだとかじやなくて、俺の出生とか全部を存在じと消す
つてことかよ。これだと誰の心にも思い出は残らないよな。ある意
味、死ぬより辛いな。

俺は、屋上を飛び出した。

第1話 テスト開始（後書き）

やつと沙菜を出せた……！

でも、出番少しないです。

第2話 国際テロ組織『神の遣い』（前書き）

何でしょう。

前のサブタイトルと今回のサブタイトルのギャップの差は？

第2話 国際テロ組織『神の遣い』

俺は階段を駆け降りながら、具体的にどうするべきか考えていた。

まず思いついたのは生徒の安全の確保だ。

一つ一つクラスを回って避難を呼びかけるか放送で一気に避難させるか 無理だ。

そんなことをしているうちにテロリストたちは学校を占拠するために階段を上ってくるし、生徒の移動にしても2・3分はかかってしまう。そもそも、そんな大人数をどこに避難させる。伏獣成中央高校は1つの学年だけで13クラスもあるマンモス校だ。唯一生徒全員が入れる体育館は校舎から外れたところにあるが、移動しているときにテロリストに見つかって撃ち殺されるのがオチだ。

せめて、奈緒と沙菜の安全を確保したいが、そんな時間もないだろう。

俺は舌打ちしながら、階段を降りて、

武装したテロリストの一団と鉢合戦になつた。

「は？」

目の前にいるテロリストの合計は8人。

それぞれの手には1メートルくらいの大きなマシンガンっぽい銃。もしかしたら、ショットガンかも。

さらに、よく映画やゲームで出てくるような至るところにポケット

がついた服は、屋上で見た通り黒い色だった。一つ違ったのは、頭には二ツト帽ではなく同じ色をしたヘルメットをかぶっていた。

「そこで、何をやっている?」

8人の中の1人が聞いてきた。

「えっと……」

聞かれた俺はと「うと ダツーと回れ右してせつを降りてきた階段に走る。

その直後にダダダダダダダダダダッ！…とマシンガンの銃口から火が噴いた。

オマエらには人を殺すことに躊躇いはないのかあーーッ！…と心で叫びながら階段を駆け上がる。

「今の生徒は俺が始末しどく。お前らは作戦通り各クラスの制圧をしろ」

「」「了解」

逃げた俺のことを追いかけてくるらじい。

冷や汗をタラタラ流しながら俺は屋上のドアを開けると、転がり込むように外に出た。

「動くな」

その言葉だけで俺の動きは止まった。

恐る恐る後ろを見てみれば、ドアのどこので男がこつちに銃を向けていた。

俺は意を決して声を出した。

「こんなところで俺を殺しちまつていいのか？人質は多い方がいいだろ」

「命乞いか？生憎とこの学校には人質はたくさんいるんでな。1人や2人殺そうが構わないさ」

まあ、当たり前か。

アニメや漫画のよう、これから殺す奴の命乞いに応じるなんて逆転フラグ全開だしな。

…………こんなとおり、そんなことを考えてどうすんだ！！

今は目の前にテロリストに集中すんだ。

何か打開策は…………いや、あるつちやあるんだが、ぶつつけ本番でやるのはマジ怖い。

「まあ、10秒くれてやる遺言でも考えてる」

よし、逆転フラグ全開。

俺は『マテリアルパズル素材構築』をあることに使ってからテロリストに向かって走った。

テロリストの方も俺の行動は予想外だったらしく驚いたようなそぶ

りを見せたが、すぐにマシンガンを構え俺に狙いを定め引き金を引いた。

ガガガガガガガガガッ！…とマシンガンから何十発の銃弾が飛び出た。それらの銃弾の中には俺の脇を外れていくものはあったが約9割の銃弾の延長線上には俺の身体があった。

もともと、そんなに距離も離れていないためこんなに銃弾が当たるわけだが、俺は構わず走った。

そして、飛んできた銃弾は俺の身体に触れる ことはなかつた。全ての銃弾が、俺の身体あと少しのところに「ペシャンコ」に潰れたからだ。

まるで、固い壁に当たったかのよう。

潰れた弾丸はカラソカラソと虚しく床に転がつた。

「何いつ！？」

今度こそテロリストの顔が驚愕の表情になる。

その間に俺はテロリストの距離を詰め、右手に持つてゐる『素材構築』でつくりた武器をテロリストの腹に叩き込んだ。

「ぐぼがああつ！…？」

ゴバアツ！…と周りに衝撃が拡散しながら、テロリストの身体が面白のように吹き飛び、後ろにあつた校舎の壁にドンッ！と激突した。

テロリストはその衝撃で氣絶したのか動かなくなってしまった。

……生きてるよな？

俺は恐る恐る倒れているテロリストに近付き首筋に手を当てた。俺の頭の中では実はまだ気絶してなくて、俺が近付くのを待っているのではないか、という警戒音が鳴り響いていたが、現実は上手くいつたようだった。

「なんとかいたな。どこのアニメや漫画だよ。武装したテロリストに普通の高校生が勝つなんてさ」

いや、超能力があるからもう普通の高校生じゃないか。

それにしてもぶつつけ本番だったけど、上手くいってよかつた。

銃弾を防いだのは、周りの窒素を『素材』と規定した『絹旗最愛の『オフェンスアーマー』を『オフェンスウォール』窒素装甲』を基盤にした『窒素防壁』自分で命名 という防御技だ。

『窒素装甲』は身体から数センチと薄い装甲で銃弾は防げても衝撃は防げないものだが、『窒素防壁』はもつと厚く固くして、衝撃をも防ぐ。

これなら銃弾を何発浴びても大丈夫だろう。

ただ『窒素防壁』は目に見えないから銃弾が飛んできたら、ビクついてしまうのは仕方ないことだったりする。

そして、テロリストを吹き飛ばしたのは『素材構築』でつくった『ボンバーランス窒素爆槍』だ。

これくらいなら空氣中にある窒素分子を固体に形態変化させればできるじよ。

「とりあえず『窒素防壁』と『窒素爆槍』があればテロリストだって倒せるだろ」

その時。

気絶したテロリストの懷にある無線機から声が聞こえた。

『おー、こつまで干供相手にしてこる。作戦を実行するから早く』

「作戦つて何だよ？」

『ツーーー』

無線機から息を呑むのがわかるが、構わず俺は片手に無線機を持つて話す。

「ここの無線機の持ち主さんはそこで気絶してるぜ。テロリストとつても、たいしたことないんだな」

俺は敢えて挑発するような口調で言った。

『調子に乗るなよークソガキがーー』

ブツツーーと無線機が切れる。

一息吐いてから、俺は気絶しているテロリストから何か使えそうなものを探し始めた。

『ピンポーン、パポーン』

今度は放送が入った。

この時間に放送といふことは 。

『 こんにちわ、諸君。もう氣付いていると思うが、ここに改めて自己紹介をさせてもらおう。我々は国際組織テロ組織「神の遣い」というものだ』

「 ブッ！」

俺はその組織名を聞いた瞬間噴いた。

そんな国際テロ組織なんて聞いたことないって。ひい爺さんも適当に名前つけんじゃねえよ。

『 我々はこの学校を占拠した。抵抗する者は全力で排除し、我々の命令に逆らう者は容赦ない制裁を加えてやる』

頼むから誰も反抗なんてしないでくれよ。俺のいないとこりで反抗して殺されたりしたら『テスト』失格になっちゃうからな。

そんなことを祈りながら、俺はテロリストのポケットからスタンガンを見つけて制服のズボンの後ろポケットに閉まつておく。

できたら、使いたくないな…………。

『 まずは、クラスの代表2人。その場に10秒以内に立て』

「 何ッ！？」

人質の選出のつもりか！？

『10・9・8・……・2・1・0。時間切れた。まだクラス代表が立つてないところがあるようだな Eの生徒諸君。さっさと立ちたまえ。それとも、目の前で自分のクラスメイトが傷付くのが見たいのか？ ふむ。立つてくれたようだな』

マズいぞ。

この目の前で起きていることを話すような口調、ふりから、各クラスの教室や特別教室に仲間のテロリストから随時無線機で連絡を取り合っていることは間違いない。

それに、この短時間で各クラスを制圧するなんてこの広い学校の校舎を熟知しているとしか思えない。

先生たちがいる職員室は既に制圧されてしまっているだろう。

『立つたクラス代表2人は、10秒以内に廊下に出ろ』

このままでは各クラス代表2人が人質にされてしまう。

俺のクラス代表は奈緒なんだ。それに沙菜もクラス代表だ。この2人を人質なんかにさせるわけにはいかない。

しかし、どうやって助ける？

廊下には、各クラス代表2人とそれを監視するテロリストたちがいるから、今からドンパチ始めるのはマズい。

『全員廊下に出たな。では、私の部下が誘導するからついていくようだ』

そこで、放送は終わった。

とりあえず、人質になつたクラス代表2人が1力所に集まるのを待つてから助けに行こう。

第2話 国際テロ組織『神の遣い』（後書き）

次からは1週間に1回くらい更新できたらいいなと思っています。

『素材構築』について質問があればドシドシ聞いて下さい。

ちなみに『素材構築』はつくるだけじゃありません。

これについては、後々出していくつもりなので、よろしくお願いします。

第3話 テスト終了（前書き）

昨日の夜、奇妙奇天烈な夢を見ました。

『一方通行にサッカーを教えていた夢』

はい、奇妙奇天烈ですね。

作者は、サッカーができないのに。

しかも、その教えている内容が『サッカー選手がコーナーキックで蹴るような、横スピンのかかったボールの蹴り方』です。
もう訳がわかりません。

ということです。

第3話 テスト終了

side 那雲勝羅

待つこと10分。

現在、俺の足元には20人ほどのテロリストが転がっている。俺を排除するために、襲撃してきたテロリストたちだ。

そして、俺は平等に気絶させてやつた。

「もし、起きても縛りつけてあるから大丈夫だろ」

氣絶させたテロリストたちの武装を解除させて、屋上フェンスや床に使われている鉄と石でつくった手枷と足枷をはめ込んである。極め尽くには、フェンスや床を形態変化させて、テロリストを一ぐりにして縛つておいた。

「そろそろ、行くか

俺は屋上を出た。

side 那雲沙菜

つい20分前、私は普通に授業を受けていました。

でも、今は、

「お~りあー…せつをと歩けー！」

人質になつてます。

学校にを占拠したテロリストに人質にされて校庭を歩いてました。

私の他にも、各クラスの学級委員がいました。ここにいる人数は、学級委員2人×13クラス×3学年=78人です。

学級委員の中には、兄さんの幼なじみの奈緒さんもいました。

それにして、なぜ校庭なのでしょうか？

てつくり、どこかの部屋に監禁されるのかと思つてました。

「よし、止まれ。そこに座つてろ」

校庭のど真ん中です。

このテロリストたちが、本当に何をしたいのかわかりません。人質にしたんですから、身代金を要求でしちゃうか？

だつたら、ここに連れてきた意味は？

私はふと、辺りを見回したり座つている私たちに目を向けるテロリストたちを見ました。

なんだか、私たちの監視よりも周りを警戒しているような気がします。

「（沙菜ちゃん、大丈夫だつた？）」

「（な、奈緒さん…？）」

私に声をかけたのは、奈緒さんでした。

いつの間に近付いたのでしょうか。
全然、気が付きました。

「（シーツ。話してるのが聞こえちゃうぞ）

「（す、すこませる……）」

奈緒さんは、口元に人差し指は当たながら言った。

「（沙菜ちゃんは、大丈夫みたいだね）」

「（奈緒さんも無事で何よりです。それで、あの……兄さんの方は
？）」

兄さんも昔から無茶なことをやる人ですから、テロリストたちに反
抗しないが心配です。

「（テロが起る直前で、保健室に行つたよ。カツのことだから、
保健室に行かないで、屋上とかで寝てるかもしないわね。もしか
したら、こんなテロが起きてくることすら知らないのかもよ）」

「（……兄さんなりあつえますね）」

「（おこ、セーーー何を話してくるーーー）

「え？」

急にテロリストが私たちの方を見て、言いました。

「そこのお前。 いじつちまで来てもらひおつが」

テロリストの一人が私に近付いてきて、いきなり私の腕を掴みました。

「きやー。」

「沙菜つー。」

奈緒さんが立ち上がりてくれました。

でも、私の腕を掴んでいるテロリストが無言で拳銃を突き付けて黙らせました。

「奈緒さん、私は大丈夫ですから」

「沙菜……」

奈緒さんが心配そうに見てきました。

「いじつちに来い」

テロリストは私の背中を拳銃で押しながら、集団の外に出させます。

人質になつてゐる学級委員たちの目が私に向いていました。

「どに連れていくつもりですか？」

私は強気で聞いてみましたが、テロリストは何も答えてくれませんでした。

そして、学級委員たちから100メートルほど離れたところでした。

「おい、俺の妹に何してくれてんだ？」

突然、声が聞こえたかと思つたら、後ろにいたテロリストが吹き飛びました。

吹き飛んだテロリストは、そのまま氣絶したのか動かなくなりました。

「沙菜、大丈夫か？」

「兄さん……」

声がした方向を見ると、口元に手を振る兄さんがいました。

「に、兄さあーーーんつーーー！」

私は思わず兄さんに抱き着いて、兄さんの胸で泣きました。

「怖かつた……怖かつたですよー」

「ああ。もつと早く来れなくてすまなかつたな」

「兄さん、兄さん……！」

私はしばらくの間、泣き続けました。

Side 那雲勝羅

沙菜が俺の腕の中で泣き止むと、顔を真っ赤にして俺から離れた。

それにして、驚いたな。

『ボンバーランス室素爆槍』で屋上から飛んできて『室素爆槍』の加減がわからなくて、墜落しそうになつたのが度々 校庭の中心に集まつて人質の真上からテロリスト共を急襲をかけようとしたら、こっちに沙菜が連れて行かれるのが見えて、迷わずこっちに進路を変更したわけだ。

まさか、沙菜がテロリストに連れてかれるなんて考えてなかつたからな。

「兄さん、助けてくれてありがとうございます」

「沙菜が無事で何よりだ」

「私は大丈夫です。それよりも兄さんは大丈夫なんですか？銃で撃たれたりしてませんか？」

「大丈夫だ。問題ない」

「兄さん聞いて下さい。あそこにはクラスの学級委員たちがいるんです。だから……」

「わかつてゐる。俺が助けに行くから、沙菜は校舎の裏にでも隠れててくれ」

「ダ、ダメですよー兄さん一人でなんて無理です！テロリストたちは銃も持つてゐるんですよー撃たれたりしたら、死んじゃいますよー！」

「大丈夫さ。俺を誰だと思つてんだ？」

「私のたつた1人の兄です」

「なら、心配ないだろ？」

「そういう問題じゃありませんー！」

沙菜がふくーっと頬を膨らませながら言つた。

「さて、こんなとこりで長話なんかしてたら、そのうち見つかっちゃうな。移動して……」

ダンッ！

ピュン！と俺たちの近くの地面の土が跳ねた。

銃撃か！

テロリスト共の方を向くと、ざつと10人くらいのテロリストがマシンガンを持ってこづちに走つてくる。

「沙菜！俺が！」足止めするから、その間に前は校舎の裏に隠れてい。」

「そ、それだと、兄さんが…………。」

「心配するな。俺はお前の兄だろ？」

「わ、わかりました。でも、絶対に私のことを迎えに来て下さることよ」

「おうー。」

沙菜が校舎の裏に走っていく。

「わひと、お前ら覚悟はできんだらうな？」

「このセリフって死亡フラグだったか？」

俺は地面を蹴ると、真っ直ぐテロリスト共に突っ込んだ。

ガガガガガガガッ！とマシンガンの銃口が火を噴くが、屋上と同様に俺は構わず走る。

さらに、飛んできた銃弾は『オフェンスウォール窒素防壁』に阻まれて俺の身体に届かない。

「おー！何をやっているー！ちゃんと撃ちやがれー！」

「当たつていいはずだー！でも、倒れねえんだよー。」

「弾が当たらないから、倒れねえんだよ！」

テロリストたちが互いに叫びあっている。これで、仲間割れでもしてくれればいいんだけどな。

俺は両手に少し威力大きめの『窒素爆槍』をつくると、それを前方にいるテロリスト共の地面近くに向けて投げた。

ボンッ！！

一気に土煙が舞い上がり、

「「「ぐあああつーーー?」」」

テロリスト共の身体も舞い上がる。

10メートル近く上がった身体は、大きく弧を描きながら地面に落ちた。

はい、全滅です。

あの高さから落ちたら、まあ骨折くらいだろうな。打ち所悪ければ即死か……ヘルメット被つてるから大丈夫だろう。

俺はまだ巻き上がる土煙の中を突っ切つて、人質の元へと走る。砂は『窒素防壁』で目に入る心配はなし。

すぐに土煙の中を抜け、人質を取り囲むテロリスト共と会った。テロリスト共は驚いた顔をしている。

まあ、当たり前だろう。

一瞬のうちに、10人のテロリスト共が1人の高校生に負けたのだから。

テロリスト共は、銃を向けて一斉射撃してくるが、もうひとつの『窒素防壁』で全て防がれる。

頼むから、流れ弾とかでクラス委員たちに当たるなよ…………。

一番近くにいたテロリストに『窒素爆槍』を叩き込み氣絶させる。

その後も、無双みたく次々とテロリストを戦闘不能にしていく。

たが、やつぱり最後の1人は、

「動くな！動いたら、コイツを殺すぞ！」

こうなるわな。

「おいおい、俺に人質なんて ッ！」

「カツ！..」

人質にされているのは奈緒だつた。

「おい、少年。どんな方法をやつたかは知らないが、こいつの命を惜しければ、おとなしくしる」

その言葉に構わず、俺は奈緒を人質に取つてテロリストに歩を進める。

「動くな、と言つてするのが聞こえないのか！」

歩を止めた。

俺とテロリストの距離は、1メートル弱。つまり『マテリアルパズル素材構築』の有効範囲。

「何とか言つたらどうあつ……?」

突然、テロリストが叫び出した。

そもそものはず。今のテロリストの両足には、地面から生えた鉄の棘が貫通した状態で刺さっている。

この鉄の棘は、俺が地面の中にある『素材構築』でつくり出したものだ。

「奈緒を人質にした罰だ」

「カツちゃん!」

テロリストが苦しみ出したおかげで、捕まっていた奈緒が拘束から逃れて俺に向かって飛び込んできた。

「怖かつたよ、カツちゃん……」

「ああ。よく頑張つたな」

俺は片手を奈緒の背中に回して抱き留めた。

テロリストの方に手を向けると、自分の両足が串刺しにされていて苦し悶えている。

「よし、これで人質救出だな」

その後。

俺と奈緒たちは校舎の裏に隠れている沙菜を見つけて、一緒に隠れているように言つてから、各クラスにいるテロリストを順番に叩きのめしていった。

13組×3学年=39組もやるのは骨が折れた。尚且つ、隣のクラスに争つた音が聞こえないようにしないとダメなので大変だった。さらに、職員室や事務室にいたテロリストも同様に。

放送室にいたテロリストのリーダーも『窒素爆弾』で気絶させた。

そして、これで終わりかなと思った、その時。

『テロリストを全員倒したよ!』

何も前触れなく、頭に話しかけてくるジジイの声。

「これで『テスト』も終わりか?」

『そうじやな。『テスト』は申し分ない合格じや。能力の方もだいぶ使いこなしてきたみたいじやな』

「まだまだだよ。このチート能力の応用パターンはこんなもんじやないはずだ』

『では、元に戻すから田をつぶつておくれのじや』

「は? 元に戻すって何を……」

次の瞬間、目の前が真っ白になつた。

「う……うう……」

俺は目を覚ました。

確かにひい爺さんが、元に戻す、なんごとを……。

「はあ！？」

「うふ~どうしたんだ、那雲？」

俺の奇声に、教壇に立つて黒板に数式を書いていたる先生が聞いてきた。

「い、いえ、なんでもありません」

「やうか」

先生は黒板の方を向いて数式を書き始める。

「（え、どうなつてんだ……？何でみんな、普通に授業やつてんだ？）」

俺の目の前の光景は、いつもの日常と変わらなかつた。

初めから、テロリストが来なかつたような日常だ。

『お、元に戻つたようじゃな』

また唐突に声が聞こえるひい爺さんの声。いい加減に慣れてきたな。

「（おい、ひい爺さん。）ねばねばうるうるだ？」

教室で声を出すわけにはいかないので心中で話す。

『見ての通りじゃ。時間を戻して、テロリストなど来ないようにして。元々、あのテロリストはワシが用意した人間たちじゃからな』

「つまり、どうしてだ？」

『物分かりが悪いのう。簡単に言うとじや。学校にテロリストに来るという未来を抹消して、時間を戻した。それだけのことじや』

（それだけの！」とつて随分簡単に……待てよ……）

『どうした?

「（学校にテロリストが来るという未来を抹消したってことは、俺がテロリストを倒したという事実も…………）」

『消えたじゃろうな』

『アーティスト』

「おこ、アリ一勝手に話を切るんじや……な……い……」

いつの間にか声に出していたらしく、クラス全員が俺のことを見ていた。

「那雲、本当にどうした？」

クラスを代表してなのか先生が聞いてきた。

「えっと……頭壊れたんで、保健室行つてきます！！」

教室を出た後、俺は屋上で、もう教室に帰れない！、とさめざめ泣いた。

第3話 テスト終了（後書き）

かなり話をすつ飛ばしてますね。
すいません。

でも、作者はやつれと『テスト』編を終わらせたいわけです。
なぜなら、早く『ある魔術の禁書目録』編を書きたいからです。
はい、先ばれ（？）もここまでです。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

第4話 世界浄化師（前書き）

会話文ばっかですみません。

第4話 世界浄化師

side 那雲勝羅

「そんで、あれは何の《テスト》だつたんだ?」

『テスト』が終わり、家に帰ってきた俺は自分の部屋で一ノとひい爺さんの3人で話していた。

最もひい爺さんは声だけで姿はないけど。

『つむ。』の『テスト』は、ナグモの力を試すためにやつたんじや』

「俺の力を試す?」

「ひいおじい様、それはどういふことですか?」

『一ノには、既に俺が『テスト』を受けたことについては話してある。

『一ノよ。こんな噂を聞いたことがないか?』

「噂ですか?」

『“悪魔が各世界を支配し始めている”といつ噂じや』

おいおい、天使の次は悪魔かよ。

俺の日常が中一病で染まつていいく……。

「あ、あれは、ただの噂で根拠のない作り話じゃないんですか?」

『残念ながら、事実じや。どこから漏れたのだひつ。今では、天界中の噂になつておる』

「それと今回の『テスト』が何の関係があるんだ？」

話がズレたうなので、本題に戻した。

『そこで、我々は悪魔^{エクソシスト}が各世界の支配を防ぐために、悪魔と戦うための組織「世界浄化師」をつくることに決めたのじや。まあ、最もこの組織の存在は、天界の中でも極秘事項にされているがな』

話が飛び過ぎているが、もうそんなことは気にしない。

「そんじやあ、あの『テスト』は俺を『世界浄化師』にするための適性試験だつてことか？」

『お、今度は物分かりが早くて助かるのう。簡単に言えば、そういうことじや』

「おいおい、それでいいのかよ。こんな一介の男子高校生に世界の命運を預けるような真似をして」

「そうですよ！ひいおじい様！それに、カツは人間なんですよ。人間には、魔法や能力や特殊体質なんものが無いのですよ。悪魔と戦つたりなんかしたら、死んじやいますよ…」

「能力ならあるぞ」

「え？」

二コが呆ける顔をする。

俺は自身の能力である『マテリアルパズル素材構築』を見せるために、適当に机の上にあるシャープペンを『素材』と規定して手の上に一メートルほどの柄がない鉄の刀をつくり上げた。

それを見た二コが驚いた顔で、俺の顔を凝視してきた。

「何でカツが能力を持つてるの？」

「お前を助けてもらつたお礼として、ひい爺さんに俺の能力を開花させてもらつた。生物には、必ず能力が備わつてんだろ？」

俺の言葉に、二コは首を振つた。

その後、二コは上を見上げて、

「どういひことですか、ひいおじい様？」

『.....』

二コの質問に答えないひい爺さん。

二コは、ハアとため息をつくと、

「カツ、勘違いしているようだから言つておけば、人間には初めから何の能力も備わつてないよ」

「え？ じゃあ、俺の能力は何？」

「たぶん、ひいおじい様が勝手に授けた能力だと思つ」

「おい、ジジイ」

『……何じゃ？』

今度は返事があつた。

「どうこうとか、説明してもらおうか」

『ワシは、ナグモの中にある能力を』

「嘘をつかないで下さい。人間に初めから能力はありません。ですが、今のカツには能力がある。つまり、ひいおじい様が能力を授けたことになります。『対価』を求めるために」

「『対価』ってあれか？これをやるから代わりにそれを寄越せ的な
なのか？」

ある漫画では、相手の願いを必ず叶える代わりに、その『対価』と
して相手の1番大事なものをもらひ、ようなものもある。

それと同じことなのだろうか？

「簡単に言つてしまえばそういうこと。だから、カツも払わなければ
ならないの」

「な、何を払うんだ？」

これで、一番大事なものを寄越せ、なんて言われたらどうしようか。

明日から生きていけないかも。

『簡単なことじやよ。ナグモが「世界浄化師」になつて悪魔を倒してくれればいいのじや』

ひい爺さんが開き直つたように言つた。
も「まかすつもりはないみたいだな。

「断つたら、どうすんだ?」

「断つた場合は『対価』として、ナグモが死んだ後の魂をもりおつ
とするかの」

どこの悪魔みたいなことを言つひい爺さんだな。本当に天使か?

まあ、つまりはこうじつことだらけ。

ひい爺さんは、俺に能力を与えることの『対価』として『世界浄化
師』になつて悪魔を倒すこと。もし、断つた場合は死後の俺の魂を
もらうと。

はっきり言つて齧しだな。

「わかったよ。やつてやるわ」

「カツ!」

二コが声を上げる。

俺は二口の頭に手を乗せて撫でながら言った。

「大丈夫さ。俺にはひい爺さんからもうつた能力がある。これがあれば、誰にも負けやしないわ」

「死ぬかもしないんだよ?」

「……それは嫌だな。でも、どしどにしたって『対価』を払わなければならぬんだ。だつたら、やるしかない」

「それは、そうかもしないけど…………なら、私もやる」

「何を言つてんだ! 二口まで命を危険にさらせる必要はないんだぞ」

「私もやつた方がカツが死ぬ確率が減る。ひいおじい様、いいですよね?」

『別に構わんぞ。元からワシも二口とナグモを組ませるつもりやつたからの』

ひい爺さんの答えに、二口が笑顔を浮かべた。

『さて、ナグモの「世界浄化師」になることは決まったな。では、本題に入るよ』

話題を切り替えるよつこひい爺さんが言つた。

『本来の「世界浄化師」は、天使とそのパートナーが一つの身体に共有して、悪魔と闘うのが普通じや』

「どういつ意味なんだ？」

『言つてしまえば、2つの魂で1人といつ」とじやな。その世界でもあるじやろ?』

「……まあ、あるわな（アニメや漫画の世界で）。つまり、天使はそのパートナーに憑依するつてことか。でも、それは意味あるのか。2つの魂を1つの身体に共有するより、2人で1組の方がいいんじゃないのか？」

『昨日言つたじやろ。天使がそのまま下界に降りてしまつと、力が大きすぎて「世界の崩壊」が始まつてしまつと。だから、天使はパートナーの身体を借りて悪魔と闘うのじや』

「しかし、私たちはどうなのですか？私はこいつって身体はありますから、カツの身体に憑依する」となど無理ですよ

俺は二つの言葉に想像してしまつた。

二つの声が自分自身の中から聞こえてくる……嫌だな。プライバシーの侵害にもほどがある。

『君たちは異例じや。さつきナグモが言つた通り2人1組で悪魔と闘つてもらうのじやが、それではどうしても戦力不足になつてしまふ』

「どうしてだ？他より1人分は戦力があると思つけど」

『逆じや逆。天使がパートナーに憑依するのはもう一つ理由がある。それは、パートナーの戦闘能力の増幅じや。天使が憑依したパート

ナーをサポートすることで、身体能力の向上と魔法の使用可能という2つのコモリットが存在する』

「じゃあ、俺たちは2人1組で、そのリミットが存在しないから、他の組より戦闘力が足しに足りないわけか?」

『もう一つ。さらに、戦闘力不足の原因がもう一つある』

「……ツー」

二口の肩がピクッと動いた。

『二口は、昔に左翼を失くしてな。魔法ができないんじや。だから、力不足が否めないんじや』

「何で左翼がないと、魔法ができないのか知らないけど聞かないでおくよ。また説明されてもあれだから、そういうものだと思つとくよ」

とこつわけで、ひい爺さんが、特別に戦闘力不足な俺たちにサービスをしてくれた。

俺には人間離れの身体能力。

訓練すれば、それなりに強くなるとのこと。

二口には金色に光る剣だった。

これは二口が天界で使っていたのものらしく、二口はその剣を持ったときに懐かしそうに胸に抱いていた。相当な愛着があるみたいだな。

ちなみに、これについては『世界净化師』の収録りしへ『対価』はいらなかつた。

「「」の剣に、鞘はないのか？」

「」の持つてゐる剣は抜き身で鞘はない。

「ないよ。強いて言へば、鞘は“私”かな？」

そう言つた「」は、いきなり剣の先を自分手の平に刺した。すると、剣は「」の手の中にあるみると吸い込まれていつた。そして、剣は完全に「」の手の中に吸い込まれてしまつた。

「ね？」

と腕を広げて、「」のちを見る。

「鞘は自分でそつこないとか」

その後、ひい爺さんは修業場として異空間を用意してくれた。この異空間は、とてもなく広いらしく「」と修業しろとのことだつた。出入り口は俺が使っていない戸棚の引き出しだつた。外で修業するよりはいい。もし、外で修業して人に見つかりでもしたら、大変だからな。

そして、ひい爺さんは、

「必要なものは全部揃えてやつた。あとは、頑張るのじゃぞ」と言つて、消えてしまつた。

これが、俺との出合い。
そして、これからが運命の始まり。

第4話 世界浄化師（後書き）

異空間は、D.Bの『精神と時の部屋』みたいなのだと思つて下さい。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

次は人物設定です。

登場人物・用語解説（前書き）

なぜ『世界浄化師』でエクソシストと読むなんか聞かないで下さい。

作者が単に中二病なだけなんですから。

登場人物・用語解説

『登場人物』

NO.1

・名前
那雲勝羅
なぐもかつら

・学校
市立伏獣成中央高校2年D組

・容姿

身長174cm、体重69kg

黒髪（髪の長さは襟に少しかかるくらい、つまり主人公っぽい髪型）
中肉中背（スタミナや筋肉増強など色々と日頃からトレーニングしている）

・特徴

無茶なことをしがちで、喧嘩つ早い。

二コの曾祖父からもつた高い身体能力で、動体視力が他人より異常に高い。

異空間で、二コに稽古をつけてもらい、多人数相手でも余裕で勝てるほどの剣術を会得。

『世界浄化師』になつてからは、護身用にいつも短い木刀を腰に差している。

好きなラノベは『ある魔術の禁書目録』。

運動神経は抜群だが、学力は最低ランク。

・ 能力
マテリアルパズル
素材構築

『世界浄化師』になるときに、一口の曾祖父から『えられた能力。半径1メートル内の物質などを素材と規定し、分解・増殖・構築で別の物体などをつくることができる。

素材にする物質の質量は関係なく、基本的に原子と分子があればOK。

さらに、不確定要素の多い物質でも可能。

例えば、

小石 刀・剣（鉄原子）

空気（気体） 空気の壁（固体）（酸素・窒素など）

物体の構築時に素材は消費するが、『リセット』をすれば物体から素材までの逆再生みたいなことができる。

例えば、

刀・剣 小石

空気の壁（固体） 空気（気体）

他人の能力も構築ができる。素材にはそのオリジナルの遺伝子が必要不可欠。

例えば、

一方通行の髪の毛（遺伝子） ベクトル操作（能力）

ただし、能力を手にしてもオリジナルを超えることはできず、劣化コピーに過ぎない。能力使用時は、脳や身体の負担が大きすぎて素材構築を使うことはできない。

名前の由来は、

素材 マテリアル（英語）

構築 パズルにしたのは、素材構築が似たようなピースから1枚の絵を完成させるパズルのように似ているため。

間違つても、これと同じタイトルの某漫画とは全く関係ない（作者はこの漫画が大好きです）。

・紹介

突然、部屋に現れた二口の巻き添えで神様から『世界浄化師』に任命され、各世界で悪魔と戦う』ことになる。

二〇・二

・名前

二口＝レント＝システィーナ＝サラ＝ハマア＝クリューカ＝力
ルア＝ロン＝サウース

・学校

天界学術院中等部2年（元）

伏獣成中央高校2年D組

・容姿

身長145cm、体重？kg

長い金髪（普段は後ろを1つに縛つている）

顔はかなり可愛い（けんぷファーの世界で四大美女に挙げられる）
無駄な肉がなく胸は残念

・特徴

体術や剣術など近接格闘系ならなんでもいける（天界学術院では1・2を争う実力者）。

すごい頭が良い（天界学術院中等部で1・2位）。

少し天然でたまにドジることもある。

勝羅にだけはタメ口で、他の人には敬語。

困っている人・苦しんでいる人がいれば必ず手を差し延べる。

翼が片方しかないため、魔力を練ることができても、操ることができ

きず暴発してしまつ（小さい頃に『ある事件』で失くした）。

人間界の常識に『えしく、たまに大変なことをして勝羅を困らせる』

トラブルメーカー。

人間界では、地雲に落ちたときにできた『圧力』を抑えられる身体で暮らす。

紹介

天界で赤ちゃんを助けようとして『地雲』^{アンダークラウド}に落ちた。目が覚めたらきに勝羅の部屋にいた。それから、曾祖父に『世界浄化師』に任命され『世界で悪魔と戦うこと』になった。

NO.3

・名前
那雲沙菜

・学校

市立伏獣成中央高校1年K組委員長

・容姿

身長150cm、体重45kg

少し茶色が入つて いる髪

リボンでポニー テールにしている
すらつとした体型

日頃から食生活に気をつけて いる

胸は二口同様に残念（自分が言つては、二口以上にはあるとのこと）

・特徴

勝羅の妹。

勝羅のことは兄さんと呼び、口調は基本敬語（たまに暴走もあつ）。

学力は高く、運動神経は平均並み。

食生活に気をつけているせいか、料理がめちゃくちゃ上手い（家事もやむ）

月島奈緒とは表面上は仲が良い（でも、色々な意味で対抗心を燃やしている）。

最近の悩みは、勝羅といつが部屋で何をしているのか気になつている。

あえて言つならば《天神乱漫》の佐菜。

NO.4

月島奈緒

・学校

市立伏獣成中央高校2年D組

・容姿

長い茶髪（言つならば《緋弾のアリア》の白雪みたいな髪型）

スタイル抜群でモデル体型

・特徴

勝羅の幼なじみ。

勝羅のことが好き（猛アピールしているが、勝羅の鈍感でいつも空振り）。

料理が絶望的な下手さ（一般人が食べたら失神する。おかげでいつも毒味させられている勝羅はある程度の耐性ができる）。時々、沙菜と対立（主に勝羅絡みで）。

『用語解説』

・世界淨化師エクソシスト

天使と他世界の生物が2人1組になり、各世界を支配しようとすると悪魔を倒す役職。

天使は、天界以外の世界にそのまま出現しようとすると、その存在自体が世界全体に『圧迫』をかけて『世界の崩壊』を招いてしまうために、他世界にいる生物の身体を借り悪魔と戦う。

この法則は悪魔も同じで、その世界の生物に憑依して世界を支配しようとする。

『世界の崩壊』は天使や悪魔の出現30分くらいで始まる。ただし、二つは地雲から落ちたときに圧力を抑える身体ができたために、わざわざ勝羅の身体を借りる必要がないし『世界の崩壊』も起こらない。

『世界淨化師』の存在は天界の最高機密で、現在は10組の天使とパートナーがいる。

登場人物・用語解説（後書き）

ここまで書いたけど評価0pt。

泣いてませんよ！

これは、あれです！

田に「ミミが入っちゃつたってやつです！

本当ですよ！

……「ホンッ、少し取り乱しました。

では、次回の予告。

『世界浄化師』になつた勝羅たちに、初めての仕事。その仕事場は

『とある魔術の禁書目録』の世界だった。

第1話 初めての異世界（前書き）

さて、ようやく『とある魔術の禁書目録』編に入りました。

時系列はあまり気にしないで下さい。

強いて言えば『ブリテン・ザ・ハロウィン』と『第三次世界大戦』の間でしょうか。

有り得ませんね。

上条はイギリスからそのままロシアに行きましたし。インデックスは、ファインマのせいで『自動書記ヨハネのべ』を発動中ですし。だから、気にしないで下さい。

あと『とある魔術の禁書目録』の用語はバンバン使うつもりです。人名も同じく。

ここからは、三人称で書いていますのでよろしくお願ひします。

では、どうぞ。

第1話 初めての異世界

とある学校の学生寮の一室

午前8時30分。

「つぎやーー不幸だあーー！」

「とつま、とつま。大丈夫？」

部屋で叫んでいるのは、この世界の主人公の上条当麻。
そして、上条のことを心配しているのがインテックス。本当はもつ
と長い名前なのだが、ijiでは省略せてもいい。

この世界の主人公である上条当麻が、なぜ朝っぱらから叫んでいる
のかと言つと、

（今日は大事な定期テストの日。しかし、まさかの日覚まし時計の
電池が切れるという不幸なことが起こり、現在の時間は8時30分
と遅刻が確定しそうな…………いや、一刻も早く学校に行くべし！）

そう思い立つた上条は、超高速で制服を着用し、薄つぺらいカバン
を手にして、玄関に走り込みドアを開けた。

「とつま、急いで学校に行くのはいいけど、朝から既にお腹を空か
せているシスターさんはどうしたらいいのかな？」

インテックスの声は、外を走り抜ける上条には聞こえるはずもなか
つた。

ただ、このとき確定したのは、テストとこいつ薄っぺらい紙に散々に打ちのめされた上条が帰ってきたときに、暴飲暴食シスターさんに頭をかじられたことだった。

とある学校の学生寮

第1話 初めての異世界（後書き）

途中で、インデックスと『禁書目録』を使い分けるようにしましたので補足説明をさせて頂きます。

インデックスという言葉は、1人の少女を意味しています。これは、10万3000冊の原典を保有する『魔道図書館』の意味を表しております。

反対に『禁書目録』という言葉には『魔道図書館』も含めたイギリス清教のシスターという意味で使っております。
もしかしたら、今後もこのような使い方をしたことがあるかもしれません、その場で補足説明を致しますのでお願いします。

話は変わりまして、オリジナルストーリーの予定です。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

第2話 窓のないビル（前書き）

かなり微妙です……（^-^;）

第2話 窓のないビル

とある学校の学生寮

「つまじー・つまじょーどんの料理も全部つまじょー」

暴飲暴食のシスターが丸机に乗つてゐる数々の料理を平らげていた。

「す」い食欲……」

「胃袋は底無しなのかな……」

インテックスが食べている姿に、勝羅と二口が思わず感想を零す。

丸机に並んでいる料理は、上条に朝じはん抜きにされたインテックスに、二口が冷蔵庫にあつた食材を適当に取り出してつくりたものだ。

とやつていたのだが、インテックスの食欲が予想以上に大きく、既に上条宅の冷蔵庫は空である。

だから、今、インテックスが食べている料理が最後だつたりする。

ちなみに、それぞれ自己紹介は済んでいて、インテックスの警戒心は解かれている。

「意外だな」

「何が?」

啖いた勝羅に二口が反応する。

「二口が料理できる」とだよ。家に居たときは、そんなスキルを発揮しなかつただろ

「家にいたときは、あなたのお母様が料理してたからね。私が仕事を奪つわけにはいかないし。やつても、手伝いくらいだつたよ」

「そうなのか」

そんな会話をしていたら、インテックスが高らかに皿をかがげて、

「おかわり!」

と宣言した。

彼女には、食に対する遠慮がないのだろうか。

「もつと食べたいのは分かるけど、もつ食材がないの。だから、諦めて」

二口が優しく簡潔に言った。

「ええ、もつと二口の料理の料理が食べたい」

駄々をこねるインテックスに、勝羅は息を吐くと、

「仕方ないな。部屋に行って、何かないか探してみるか

「あ、私も行く」

そう言つて、勝羅と二口は出て行つた。

とある学校の学生寮の外

「ちょっと待つて、カツ」

「何だ?」

勝羅と二口は自分たちの部屋の前にいたが、二口が急にカツを呼び止めたのだ。

二口はカツの問い合わせに答えず、学生寮と反対側の方向に歩き出した。数メートル歩いたところで立ち止まり、足元の小石を拾つた。小石を拾つている間も、二口の田線は斜め上を向いている。

勝羅には二口が何をするのかわからなかつた。

すると、

「えいっー!」

二口は掛け声とともに小石を投げた。斜め上を向いていた視線の先に。

投げられた小石は、二口の筋力により普通の人間が視認できない速度で飛ぶ。

その時、飛んで行く小石にチリツと火花が走つた。その火花の大き

それは、やはりとても小さなものだった。

「何をしたんだ？」

勝羅が一囗の意味不明の行動に疑問の声をあげる。

「小さな虫みたいなのがいたから、小石を投げてやつつけた

「天使は、無殺生じゃないのか？」

「違う違う。虫と言つても、虫じゃないから。虫みたいな小さな物つてこと。何か監視しているよつたな感じがしたんだ」

「虫みたいな小さな物で、監視していた？何かの勘違いじゃないのか？」

「そんなことないもん。私たちが部屋を出てから朝からずっと同じ場所にいたもん」

「空中に同じ場所にいた？少なくとも、俺には見えなかつたぞ」

勝羅は、身体能力の強化で視力の強化がされている。普通の人の数十倍は良く見える。その視力を持つてしても、見えないと「う」とはただの勘違いか余程小さいのがどちらかだ。

「あの大きさは、カツには見えないかもね。だつて、すうい小さいかつたし」

「どうやら、後者のようだ。

しかし、それが見える一囗の視力はどれだけなのか？

一方、勝羅はその正体について考えていた。原作を読んでいる勝羅には気がなることだ。

（とても小さくて、空中に浮かんでる。しかも、虫ではなく物。さらには監視をしている。そして、あの火花…………まさか…？）

一つの結論に至った勝羅は二コに聞いてみる。

「二コ、そのやった物は、どのくらい大きさのものかわかるか？」

「うん、カツたちの単位で言つと、ナノメートルくらいかな」

この少女は、自分が天使にも関わらず人間が使つていてる単位まで熟知しているようだ。

「やつぱつ…………」

二コの答えに、自分の結論に間違いがないことを確信した勝羅。

「私がやつつけた物がわかつたの？」

「察しがいいな。今の二コの答えで確信したよ。二コがやつつけた……いや、壊したのは『アンダーライン滞空回線』だ」

「うん？『滞空回線』？」

「簡単に言つてしまえば、小型の監視カメラつひとつこりだな」

「もしかして、壊したのはマズい？」

「二口が罰が悪そうな顔をする。

「いや、大丈夫だろ。ただ、壊したのは謝らないといけないかもな

「だつたら、私が

「二口が行く必要はない。」ニコド、インデックスの相手でもしてくれ。謝りに行くのは俺だけでいいし」

二口にアレイスターの相手ができるとも思えないしな、戦闘ではなく話術という意味で、と勝羅は考えていた。

「心配するなつて。1時間後くらいには帰つてくるよ

そう言つた勝羅は、窓のないビルを目指して第7学区を歩いて行つた。

窓のないビル

第7学区の地形を全く知らない勝羅だが、運よく広い通りの先にある窓のないビルらしき建物が見えた。

広い通りを歩く人の姿が1人2人見られる。

学生ではない。店を経営する大人の姿だ。

学園都市にある数々の店の店員のほとんどは学生である。店員の学生たちを束ねている店長というのが大人たちだ。だから、一つの店

舗に、普通は1人2人はいる。多くても4～5人くらい。中には、1人の大人が2つの店を管理している場合もある。

そんな話はさておき、目的の建物を見つけた勝羅は広い通りを歩いて行く。

そして、窓のないビルの前に着いた。

とりあえず、窓のないビルの周りを一周してみる。

「ホントに、ドアも窓もないんだな。これなら、誰も入れないわけだ」

窓のないビルに入るには、空間系移動能力者の『案内人』に連れてきてもららうしかない。『案内人』の役を結標淡希^{むすじめあわき}がやっていたが、『残骸』^{レムナント}の事件で既にその役は解かれている。学園都市に反旗を翻すような奴に、大事な役を任せるわけがないのだ。

（結標がいなとこで、今は別の空間系移動能力者が入ってるだろうな。まあ、そんなことはさておき……）

勝羅は両手に『窒素爆槍』をつくり上げ、

「ちょっと試してみたいことがあるんだよ！」

両手につくつた『窒素爆槍』を窓のないビル田掛けて投げた。もちろん、周りに被害が及ばないように上方を狙つて。

ゴバアアアアアアアアアアアアアアアアンツ！……！

壁に叩きつけられた『窒素爆槍』が爆発する。

勝羅はさらなる追撃として新たな『窒素爆槍』をつくり上げた。

それをまた投げる。

つくつては投げる。つくつては投げる。つくつては投げる……ずつとその繰り返しを続けた。

周りの建物にいる人が繰り返される轟音に驚いて次々と逃げ出しているにも関わらず。

そして、100発以上は投げたといつとこりで攻撃は止んだ。

「あんだけ投げたといつのにめちゃめちゃタフじゃねえか」

あれだけの猛攻を受けた窓のないビルの壁には傷一つ付いていない。

当たり前である。

窓のないビルの壁は『0930』事件で一方通行に地球の自転のベクトル使つたビルの攻撃をものともしない史上最強の要塞。アクセラレータ100発以上の『窒素爆槍』と地球の自転のベクトル使つたビルの攻撃、どちらが攻撃力が上など言うまでもない。

「この田代ビルの強度が見れたからいっか。さて、ビルの中に入りますか」

勝羅が『窒素爆槍』を撃つたのは、ただ単に窓のないビルも強度を見てみたいだけの話。

最初から『窒素爆槍』で窓のないビルに穴を開けられるなどとは思つてはいない。

勝羅が窓のないビルの壁に手を添えると、直後に音もなく絶対防御を誇る窓のないビルの壁に大人1人が通れるくらいの穴ができた。

勝羅が『素材構築』でビルの壁を素材と規定し、分解と構築を行つたのだ。

素材にされたビルの壁は、勝羅の手の中に小さい球の形にされていた。

「よし、これで開いたな…………あ～これは無理だな

穴の中を覗き込んだ勝羅が呟く。

開けた穴から見ると、幾千のもコードやモーターみたいなものがビッシリと詰められていた。とてもじゃないが、勝羅が通れる隙間がない。猫の1匹でさえこの中を潜るのは難しいのではないだろうか。

（まあ『素材構築』でコードを分解していけば中に進めるけど、万が一アレイスターの生命維持装置のコードにつつかり分解したら大変なことになるな）

その時、ブーブーブーブーと勝羅のポケットの中にある常時マナーモードの携帯が振動した。

この世界に来るときに、何かに使えばいいこと持つてきたのだ。勝羅の携帯は学園都市の『外』と同じ世代の携帯で、学園都市で流通している携帯とは違う。いや、そんなことはどうでもいい。

それよりも、なぜ学園都市に来たばかりの勝羅の携帯に電話がかかってくるかだ。もちろん、電話番号など誰にも教えた覚えはない。

勝羅は振動する一つ折り携帯を取り出し液晶画面を開けた。

液晶画面には、非通知の文字が映し出されている。

ピッと通話ボタンを押して、携帯を耳に押し当てる。

「おはよっ、アレイスター」

勝羅が電話の相手が口を開く前に口を開いた。

『…………わかつていたのか？』

「わかつていたもなにも、こいつやつて壁に穴を開ければ、アレイスターが何かしらの方法でコンタクトを取ると思っていたよ。まさか、俺の携帯に直接かけてくるとは思わなかつたけどな」

『何が目的だ？』

「話が早くて助かる。とは言つても、こいつちは連れが監視カメラを壊したことを探りに来ただけなんだよ。できれば、電話越しじゃなくて、直接会いたいんだけど」

『断つたらどうするつもりだ？』

「断る？もし、断つたら…………このビルを蜂の巣にする

『わかつた』

アレイスターはそれだけ言って、電話が切った。

「最初から穴は元に戻すつもりだつたしな。『リセット』」

勝羅は手の中にある、小さな球をビルの壁に“リセット”する。瞬時に穴は塞がり、元の壁に戻った。

「もう言えぱ、
空間移動なじごじゅつ テレポート
ビルの中に入るんだ？」

第2話 窓のないビル（後書き）

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

次回は、アレイスターと対談です。

第3話 演算型・衝撃拡散性複合素材（前書き）

このタイトルを見て、一体どれだけの人が「ああ、アレか……」と言えるか。

ちなみに、作者は調べるまでこの単語は出てきませんでした。

窓のないビル

「中はこうなつてんだな」

「珍しいのか?」

「少し感動しているだけだ」

勝羅は窓のないビルの中にいた。

どういう方法で窓のないビルに入つたかというと『素材構築』で壁と『コードを分解』ではなく結構の後に着任したと思われる空間系移動能力者の『案内人』に連れてこられたのだ。

そして、勝羅の目の前には、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』、学園都市統括理事長アレイスター・クロウリーが弱アルカリ性の培養液が入つた水槽に緑色の手術衣を着て逆さまになつて浮かんでいた。

「とりあえず、詫びる。『滞空回線』を壊してすまなかつた」

頭を下げる勝羅をアレイスターは眉一つ動かさず見ている。

「君は、なぜ『滞空回線』を知つている?」

『滞空回線』の存在は、学園都市の機密部類に入る。

その存在を知つてゐるのは、せいぜい一握りの『闇』の人間だけだ。

例外として、暗部の『グループ』や『スクール』くらいだろう。だから、学園都市の一介の高校生には、知らないはずのこと。

とは言つても、勝羅の場合は『原作』を読んでるからなのだが。

「たまたま噂で聞いただけだよ。まさか、本当にあるとは思わなかつたけどな」

「……そつか」

アレイスターが短く返事した。

（ああ、ヤバイかも。これは、田をつけられたみたいだな……まあ、いつか。何かしてきたりやつ返せばいいだけだし）

「」で、勝羅はある事を思いついた。

「アレイスター、頼みがあるんだけど」

「何だ？」

「『でもいいから『演算型・衝撃拡散性複合素材（カリキュレイト＝フォートレス）』くれない？』

一方通行のあの地球の自転ベクトル攻撃すら耐えたビルの壁の素材とされている『演算型・衝撃拡散性複合素材』。

これがあれば、勝羅は絶対防御とも言える壁を手に入れることができる。

「」にメリットはあるのか？

「ない」

勝羅はきつぱり言つた。

「なら、ダメ」

「ダメなら、壁から持つて行く」

「……1時間後に君の家に届かせるようにしておひ

「サンキュー」

内心でガツツポーズを取る勝羅。

勝羅が、さてと帰るか、と思つたときアレイスターが聞いてきた。

「君は、何者だ？」

「おいおい、かの世界最高の魔術師とも言われていたアレイスター＝クロウリーが何を聞いてんだ？」

「私の正体も知つて居るとはな。これは驚きだ」

「驚いてるよううに全く見えないな。……まあ『演算型・衝撃拡散性複合素材』をもらえるんだし、答えてもいいか。アレイスターの方でも敵ではない」

そう言って、勝羅は姿を消した。

『案内人』に空間移動してもらったのだ。

広い空間の中にいるアレイスターは、珍しく笑いを零した。

「これは、いい『人間』が入ったものだ。まさか『幻想殺し』の寮の下にいるとは、私もまだ甘いものだ」

アレイスターが勝羅たちに気付かなかつたのは、二口の曾祖父が情報操作をしたせいなのだが、それに気付くことはない。所詮はアレイスターも『とある魔術の禁書目録』の世界の住人ということだ。

「それに一緒にいるのは『天使』とはな。さて『プラン』の短縮に役立つてもらおうか……」

とある学校の学生寮

勝羅が窓のないビルから帰つてみれば、

「ヤキソバ！ヤキソバ！」

全く遠慮というのを知らない銀髪シスターが、右手にフォーク、左手にスプーンを持つて、丸机のところでウキウキと両手を上下に振つていた。

焼きそばをフォークとスプーンで食べるつもりだらうか？

「あ、カツ。お帰り。どうだつた？」

「『せキッチンのところ』で、焼きそばをつべつていた。

「大丈夫、大丈夫。問題なし」

「そう、よかつた」

二口が胸に手を当ててホッと息を吐く。

「そんなに心配するよつなら、最初から壊さなきやいいのに……」

その勝羅の呟きは、焼きそばをつべるジローとこつ音に搔き消された。

その後、約1時間。

勝羅たちはインデックスと他愛もない話をじて過ごした。

内容が、上条に対してもインデックスの愚痴だが。

1時間後。ピンポーン。

「来た！」

この瞬間を待つていたかのよつに、勝羅はガバッと立ち上がり、ドアに向かつた。

今、勝羅は自分の部屋に居る。

理由は単純で届け先がこの部屋だから。

勝羅はドアを開け、配達員の若い兄ちゃんから『演算型・衝撃拡散性複合素材』が入っていると思われる箱を受け取り、ボールペンでサインをした。

ドアを閉めると、箱を丸机の上に置きビリビリとガムテープを剥がす。

そして、入っていた。

発砲スチロールに埋もれていた特殊と思われるようなケースに。米粒ほどの『演算型・衝撃拡散性複合素材』が。

「小っさあー、マジで1gの『演算型・衝撃拡散性複合素材』を送つてきやがつた」

確かに、勝羅は『演算型・衝撃拡散性複合素材』を1gでもいいと言った。理由は、単純で『素材構築』で『演算型・衝撃拡散性複合素材』を増殖させればいいと考えていたからだ。

米粒ほどの『演算型・衝撃拡散性複合素材』をケースから取り出し、手の平に乗せてみる。

「大きさの割には意外と重さがあるな……1gだけど」

本物の米粒は1gもない。

だが、この米粒ほどの大きさをした『演算型・衝撃拡散性複合素材』が1gあるのは単純に密度がとてもなく高いだからだろう。

「とりあえず、増殖させてみるか」

勝羅は『演算型・衝撃拡散性複合素材』を縦横1メートルの鉄板型

に増殖させた。

最初は、手頃な大きさというやつだ。

「『』のサイズだとさすがに重さがあるな……」

米粒ほどの大きさで1kgの『演算型・衝撃拡散性複合素材』を1平方メートルで約10キロほどある。

（問題は、これをどうやって常時携帯するかだな。ポケットに入れとくか……ダメだ。戦いのときに落として、能力範囲外に出たら終わりだし……あ）

俺は適した形を思いつき、鉄板型『演算型・衝撃拡散性複合素材』を崩してその形にする。

「いいんじゃないかな？」

俺の右手首にリングが通っていた。

このリングは『演算型・衝撃拡散性複合素材』だ。大きさや太さは戦闘に邪魔にならないように調節してあるし、右手首にあることでもぐるに『演算型・衝撃拡散性複合素材』の壁を展開できる。

「でも、これってホントに『演算型・衝撃拡散性複合素材』なのか？」

勝羅に『演算型・衝撃拡散性複合素材』の本物かどうかは判断ができない。

アレイスターがメリットなしで送つて来たものだから信憑性には欠ける。

「どれくらい耐久性があるか見てみるか。方法は……一コに殴ってもらえればいいつか」

「『ピッキン1発で『窒素防壁』を破る一コの腕力がどれほどものなのかは勝羅にはわからないが、1発のパンチで鉄筋コンクリートのビル1つは簡単に壊れるのではないか、と失礼極まりない予想する。

「…………というわけだから、ちょっと力入れて殴ってみて」

「別にいいけど。壊れても知らないよ?」

「壊れたら、その時はその時さ」

勝羅と二コは学生寮の駐車場らしきところにいた。

インデックスの方は二コがつくつた焼きそばをガツガツ食べている最中である。

件の『演算型・衝撃拡散性複合素材』は約2メートルの壁となつて地面に突き刺さっている。

「それじゃあ、行くよ」

『演算型・衝撃拡散性複合素材』の前に立つた二コが小さく振りかぶり拳をぶつけた。

「アアンッ！」と辺りに乾いた音が鳴り響く。

「驚いた……」

「だろ？ これで耐久テストは合格だな」

『演算型・衝撃拡散性複合素材』は突き刺された位置から1ミリも動かず、微動だにしないで二つのパンチを難無く受け止めた。

こうして、本当に勝羅は絶対防御とも言える素材を手に入れたのだった。

第3話 演算型・衝撃拡散性複合素材（後書き）

『演算型・衝撃拡散性複合素材』については、色々な説があると思いますが、作者が勝手に都合のいいように解釈しました。『了承下さい。

それにしても、窓のないビルってどうなつてんでしょうね？

結標淡希曰わく「窓のないビルなどではないらしい」です。

核兵器ぶつけて、爆発は『演算型・衝撃拡散性複合素材』で防ぐとして、放射能とかはどうなんでしょうね？

……通りそうにありませんね。

では、あのビルの外壁には『演算型・衝撃拡散性複合素材』以外の素材が使われていることになります。

窓のないビルの魔術的防御説は、作者は「無し」という考えです。理由は、ヒューズ＝カザキリです。『界』全体の圧迫との魔力の循環不全を引き起こしますから、万が一ヒューズ＝カザキリの出現（現出？）で魔術的防御が機能しなくなる可能性が無きしにも非ずだからだからです。靈装とかなら別ですが。

『演算型・衝撃拡散性複合素材』も謎ですね。素材自体が衝撃の威力や向きを演算を行い、他方に衝撃を拡散させる、とかでしょうか。名前からしてそんな感じです。もしかしたら、一方通行の演算バターンを応用しているのかもしれませんね。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願ひします。

次回は、『とある魔術の禁書目録』の世界で主人公の初の戦闘です。

第4話　　▼学園都市第1位（前書き）

戦闘シーンをワクワクしながら書いている作者です。

第7学区

『演算型・衝撃拡散性複合素材』の耐久性を知った勝羅は部屋に戻らず、また第7学区を放浪し始めた。

勝羅には捜し人がいる。

だが、どこにいるかはわからない。

第7学区のコンビニで缶コーヒーでも買っているだろ？と勝手な推測をしている。

捜し始めて20分後、見つけた。

缶コーヒーが入っていると思われるコンビニの袋を片手に、カツンカツンと現代的な杖をついている一方通行アクセラレータを。

捜し始めて20分で見つかるのはかなり確率低いが、エンカウントしたのだから仕方ない。

勝羅は背を向けて歩く一方通行を尾行することにした。理由は單純で一方通行が居候している黄泉川愛穂のマンションを突き止め、打ち止めに会つてみたいだからだった。

（イギリス清教の女子寮にも行つてみたいな……）

そんな思いを馳せる勝羅だが、他人である自分を入れてもらえるわけがなく、マンションや女子寮の入口で門前払いを喰らうことを忘れてはいけない。

そんな時、勝羅の尾行のターゲットの一方通行が不意に路地裏に入つて行った。

(マンションに帰るのに、路地裏に入るのか)

勝羅は一方通行が曲がったところで、壁に背を這わせながら、顔だけを路地裏に出してみると

「俺に何か用か?」

その言葉とともに、コシンと額に突き付けられる黒い物体。

「あ、あれ……?」

イマイチ状況把握ができていない勝羅が間抜けな声を出す。

「もう一度聞く。俺に何か用か?」

「……ああ、なるほど。これはヤバイ状況だな」

やつと状況を把握した勝羅が壁から身体を離し、一方通行の前に出る。

一方通行はその間も銃口を額から外さない。

視線をずらしてみると、道の隅にポリ袋が置いてあった。

「いつから、尾行しているとわかつた？」

「質問をしているのはこいつだ。さつさと答える。それとも、このまま頭に風穴を穿けるか？」

額に突き付けた銃で脅す一方通行だが、勝羅の『窒素防壁』で頭に風穴を穿けられるわけがない。

「それは嫌だな。まだ死にたくないし」

「だつたら、答えろ」

「そうだな。一方通行に お願いをしにねッ！」

台詞の途中で勝羅が一方通行の腕を蹴り上げようとする。咄嗟の勝羅の反撃に、一方通行は銃の引き金を引こうとするが、引かれる前に勝羅の足が一方通行の腕を蹴り上げた。

蹴り上げられた拍子に、一方通行が持っていた銃も高く空中に舞い上がった。

一方通行が距離を取るために後ろに飛び、左手でチョーカー型電極のスイッチを入れる。

持っていた現代的な杖はコンビニの袋があるところに放り投げた。

一方、勝羅は一方通行の腕蹴り上げてからその場を動いていない。

「能力使用モードか」

銃を突き付けた時点では能力使用モードじゃなかつたのか、と言われ

るるうではない。勝羅は一方通行を見たときに、チョーカー型電極のランプが通常モードの赤色になつてゐるのを確認している。もし、能力使用モードの緑色のランプだつたら、別の方法で切り抜けるだけ。

最も、チョーカー型電極のバッテリーをできるだけ節約したい一方通行が下手くそな尾行者相手に最初から能力使用モードを使わない。

「コイツのことを知つてゐみたいだな」

一方通行がチョーカー型電極を指先でトントン叩きながら言った。

「まあね。ちなみに、それをつくつたのが『冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）』だつてのも知つてるよ」

「あの医者のことまで知つてゐるのか」

「さて、おしゃべりはここまで。俺のお願いを聞いてもらひえないか？」

「そのお願いとやらひてみな」

「そればどうも。お願いと云つのが、髪の毛一本くれない？」

「髪の毛だと？」

一方通行はそのお願いとやらひに驚く。

「オマエは『外』の回し者か？ それとも、俺のクローンでもつくるとする馬鹿な科学者の刺客か？」

学園都市の能力者の遺伝子は常に『外』の研究機関に狙われている。
大覇星祭などがいい例だろう。

「怖い」と言つたよ。一方通行のクローンなんて怖すぎ。クローンは美琴だけで充分だ。あと『外』の回し者でもないから。髪の毛が欲しいのは、俺の能力の糧になつて欲しいからさ

「信じられねエな。やはり、そのお願いとやらば、聞き入れられねエな」

「やつぱり? じゃあ 力ずくか」

「面白エ。来いよ」

その言葉が合図になつたのか、勝羅が一方通行に向かつて、人間の限界以上の速度で走り出す。

一方通行は勝羅が予想以上のスピードで来たのに驚いたが、すぐに腰を落とし両足のベクトルを操り、勝羅に突撃した。

一方通行が勝羅の顔に向かつて手を突き出す。この手に捕まれば顔全体にベクトル攻撃を喰らわされるが、勝羅はその手を身体をくるりと捻つて避ける。そのまま遠心力を足に乗せて、がら空きになっている一方通行の腹に蹴りを入れた。

もちろん『反射』を設定している一方通行に遠心力を乗せただの蹴りなんて通じるわけがない。

勝羅の足が一方通行の腹に当たつた瞬間『反射』が発動し、勝羅の蹴りが弾かれる。勝羅の身体は『反射』された足に引っ張られて、路地裏を抜けて路地に向かつても凄いスピードで出て行つた。

「あア？」

自分が優勢にも関わらず、今の現象に一方通行は首を傾げた。

パンチや蹴りのような近接攻撃は一方通行の『反射』で全て防がれ、尚且つ攻撃した腕や足の骨は必ず折れる。これは『反射』したベクトル攻撃を受けた骨が他方向に受け流すこともできない力に耐え切れないのである。

だから、今まで一方通行に無謀に立ち向かってきた無能力者（レベル〇）は容赦なく手首や足首を折つてきた。

それが今『反射』した足は折れることもなかつた。つまり、あの足は一方通行の『反射』を耐えたということになる。耐えたからこそ、路地まで吹き飛ばされたのだ。

だから『反射』を耐えたことこそ、一方通行は一つの結論に達する。

「駒場と同じ発条包帯。^{ハードテーピング} それも、耐久度がある高性能なやつか

発条包帯の効果は、端的に言つてしまえば身体能力の向上。リスクがあるが、そこを我慢してしまえば強力な武器となる。

「駒場とか懐かしいね。最初は無能力者集団のリーダーとかであまり気に入らないかつたけど『あの事』で一気に気に入つたな。駒場のサンタ姿とか見てみたかったよ。確か、一方通行が殺したんだよね。全く酷いことをする」

そんな一方通行の呴きに道路のフェンスにぶつかった勝羅が答えた。

「テメヒ、ビニまで知つてやがる？」

「少なくとも、一方通行よりは知つていい。あと、俺は発条包帯なんてやつてないからね。こんな貧相な身体では発条包帯のリスクに耐えられない。『反射』を防げたのは、俺の能力のおかげさ」

一方通行の『反射』を防げたのは、勝羅の高い身体能力と『窒素防壁』のおかげだつたりする。今の『反射』で『窒素防壁』の一部が破壊されたが、即座に『素材構築』で再構築して修復させた。

「俺の『反射』を受けてももピンピンするんて便利な能力だ。だが、そんな守りの能力では俺には勝てないぞ」

「そんなことないさ」

勝羅が台詞が終わると同時に前に右手に『窒素爆槍』をつくり出し自分と一方通行の中間地点辺りに投げた。

投げられた『窒素爆槍』は地面に着弾すると、周囲に粉塵を巻き上げる。

「田畠ましのつもりか」

粉塵を巻き上げた勝羅は後ろの道路のフェンスを乗り越えて道路に出て、向こう側に渡り去とする。車は来ていない。

後ろからガソッ！と鉄がひしゃげるような音がした。

後ろを振り向くと、さつき乗り越えたフェンスが砂塵を切り裂きながらこっちはにもの凄い速度で飛んできた。

勝羅は咄嗟に手を飛んでくるフェンスの前に翳して、フェンスを『素材構築』で分解・構築をしようとする。

手を翳したのは、単純に『素材構築』の効果範囲を広げるため。そして、飛んでくるフェンスが勝羅の『素材構築』の分解・構築で半径が1ミリにも満たない球に変えられ、勝羅の手中に収まる。

また、勝羅の耳に風を切る音が聞こえてきた。

勝羅は、反射的に手首に通っているリングの一部分を分解・増殖・構築で『演算型・衝撃拡散性複合素材』を展開させる。

直後、上空から降ってきた一方通行の蹴りが『演算型・衝撃拡散性複合素材』にぶつかった。だが、クレーターを簡単につくるような衝撃は瞬時に拡散され、勝羅に衝撃が届くことはなかった。

一方通行の表情が驚愕の色で染まる。

まさか、自分の蹴りが止められるとは思っていなかつたからだ。

一方通行が上空から降ってきたのは、砂煙から逃れた勝羅を見つけるために、砂煙より高い位置から捗そうとしたからだ。

一瞬だが動きが止まつた一方通行の隙を勝羅が見逃すはずもなく攻撃を仕掛けた。

周りの砂鉄を使い、『演算型・衝撃拡散性複合素材』の上に鉄の棘を大量につくり出した。一方通行の眼を目掛けて。ガガガガガンッ！と眼を狙つた鉄の棘は『反射』で折れてしまう。

今の状況は、勝羅が展開した『演算型・衝撃拡散性複合素材』の上に一方通行がいる格好で、その下から勝羅が『演算型・衝撃拡散性複合素材』が落ちないように下から両腕で支えている。

「“リセット”」

勝羅は一方通行の視界が鉄の棘の破片である程度埋めつくされるている間に、展開されている『演算型・衝撃拡散性複合素材』をリングに戻した。

それにより、一方通行の身体が重力により落ちる。

勝羅は一方通行が浮遊感を感じている間に、自身の身体を横にずらして一方通行の横つ腹に蹴りを入れた。また『反射』が発動して、勝羅の身体が吹っ飛ぶ。吹っ飛ばされた勝羅は空中で体勢を立て直して上手く地面に着地した。

一方通行が地面に着地している時には、勝羅は一方通行から遙か離れた位置にいた。

（アーッ、俺の『反射』を利用しやがったのか…………！？）

勝羅がいぐら『反射』に耐えられると言えど、一方通行の近距離戦闘では不利となる。だから、勝羅は近くまで来た一方通行から距離を取るために、一方通行の横つ腹に攻撃することで『反射』を利用して、自分の身体を吹っ飛ばさせて距離を取ることができる。

自分の足で距離を取らなかつたのは、単純に『反射』と『瞬発力』の初速が違うからだ。

さて、勝羅と一方通行は互いに距離が離れている状況にいる。

「一方通行。お前は弱いぞ」

「ツ！？」

勝羅の言葉に一方通行が眼を見開いた。

そつと言えば『原子崩し』を窓のないビルにぶつけたら、どうなるのでしょうか？

『原子崩し』の概念は『攻撃力』ではなく『溶かす』ですからね。窓のないビルの壁が溶ける？

『原子崩し』へ窓のないビル？

作者としては、窓のないビルだったら溶けた場所から再生していくような常識外れなことをやるような気がします。

さて、ここで問題を出したいと思っています。

第1問、『原子崩し』でも溶けない物はなんだ？

引っかけ問題などではありません。真面目な問題です。
解答は次の更新で！

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願ひします。

次回は、一方通行と決着です。

第5話 力と技（前書き）

解答です。

正解は『上条の右手』と『未元物質』です。

上条の右手には、幻想殺しがありますから原子崩しは効きません。
未元物質は、独自の物理法則を有しているため、既存の物理法則で溶かす原子崩しは効きません。

解説は以上です。何か不明な点があれば、できるだけ答えようと思
います。

さて、今回のです。

何でこうなったんだが、作者でも謎です。

第5話 力と技

第7学区

「一方通行。お前は弱いぞ」

「ツ！？」

勝羅の言葉に一方通行が眼を見開いた。

「お前は自分の能力に頼り過ぎている。今の状態では『技』を持たない子供が単純に『力』を振り回しているに過ぎない。そんなことでは、打ち止め（ラストオーダー）も守られないぞ」

「テメエに、何がわかる…………」

一方通行が声に怒氣を含ませて言つた。

「俺の場合は『わかる』というより『知つていい』だがな…………。一方通行に聞く。『0930』事件で木原数多から打ち止めを助けられなかつたのは誰だ？木原にバカスカと殴られたのは誰だ？」

「黙れ…………」

「お前だろ。あの時に、自分の無力さがわかつたんじゃないのか。だから、打ち止めを守るために暗部に」

「黙れっつてんだろオオツ！？」

一方通行が足のベクトルを操り、勝羅に突っ込んできた。

2人の距離は一気に縮まり、一方通行の手が勝羅の首を狙う。

しかし、あと少しというところで一方通行の視界から勝羅の姿が消えた。

次の瞬間、一方通行の腹に勝羅の蹴りが入った。

勝羅の足が一方通行の腹にめり込む。

「がはア……ッ！？」

一方通行の身体が吹き飛んだ。

地面と何度もバウンドを繰り返しながら、じりじりと転がり、先程立っていた位置より後ろの位置で止まる。

「テ、テメエ、木原と同じことを……！」

咳込みながらも手を地面に立てて起き上がるうとする一方通行。

「よくわかったな。今のは木原数多がやつた対一方通行の戦いの方だ」

勝羅が当たり前のように言つ。

『0930』事件のときに、木原数多が一方通行に使つた戦法（通称、木原神拳）は、拳を当たる寸前で止めて引くことで『反射』を逆に利用し、一方通行の身体にダメージを入れることができる。今まで、勝羅が『反射』されるのをわかっていて蹴りを入れていた

のは、木原神拳をやろうとしていたから。

ちなみに、今成功したのは全くの偶然である。

そして、普通は一方通行がこんなに吹き飛ぶことはないのだが、そこは勝羅の身体能力の高さがものを言つている。

もう木原神拳は使える。タイミングを掴んだ勝羅が失敗することはない。

「驚いてるのか？木原と同じことをやつたのが」

そんな勝羅の問いに一方通行は答えず、腹を押さえながら立ち上がつた。

腹を押さえているのは、蹴られた場所の骨が折れているのだらう。

少し強かつたかな、と勝羅は気楽に考える。

「どうする？まだ戦うかい？それとも、素直に髪の毛を渡す？」

「…………」

一方通行は答えない。

ただ、勝羅のことを真つ直ぐ見ているだけ。

「だんまりか。じゃあ、倒すまでだ」

ダンッ！と勝羅が地面を蹴つた。

先程の突撃より速い速度で一方通行に突撃だ。数瞬とも言える時間の間に一方通行に近付く。

勢いを落とす」とのない勝羅の蹴りが一方通行を襲つ。

その時、一方通行の手が動いた。

「よく考えたな」

その行動に勝羅は少なからず驚いた。

勝羅の蹴りに『反射』が効かないのなら、それを掴んでしまえばいい。一方通行の手に掴まれてしまつては、木原神拳もへつたくれもない。

「だが、残念。明かされた種は効かない」

一方通行の手に当たる寸前で勝羅の足が止まり、代わりに勝羅の拳が一方通行の頭に目掛けて振り下ろした。

「ガニッ！」と一方通行の身体が地面にひびを入れながら叩き付けられた。

「ぐふウ……ツ！？」

脳を搖さ振られる感覚が一方通行を襲う。
全身から力が抜けるのがわかつた。

「終わりか？一方通行？」

勝羅が一方通行を見下ろす。

対して、見下ろされている一方通行は動けなかつた。
すぐにもこの野郎を叩き潰したい、と思っても、肝心の身体が全く動かない。動いても、右腕の一本か。

「ん？」

突然、倒れた一方通行の高く右腕が上がる。

勝羅は最後の悪あがきかと思った。

このボロボロの一方通行に、ここで1発逆転の方法があるとは思わなかつた。

これが油断だつた。ここで忘れてはいけなかつた。

曲がりなりにも、一方通行はこの世界の1人の主人公であるということを。

直後、一方通行の振り下ろした右腕がひび割れた地面をさらに叩き割り、周囲に無数の石の破片を銃弾のように飛ばした。

これには勝羅も焦つた。

いくら『窒素防壁』があつても、至近距離から放たれる石の破片を防げない。

ある程度離れていれば、視認できるので持ち前の反射神経で絶対防御とも言える『演算型・衝撃拡散性複合素材』を即座に展開せりなりして防ぐことができる。

『窒素防壁』はその強度を完全に把握していないので、最後の防衛ラインとして残している。万が一の場合というときのためである。つまり、攻撃は『演算型・衝撃拡散性複合素材』ができるだけ防ぐというのが、勝羅の戦い方であつた。

しかし、今回は違う。

勝羅と一方通行の間隔はわずか数十センチ。その『演算型・衝撃拡

『散性複合素材』を展開する暇もない至近距離で銃弾より速い初速を持つ石の破片をい受ければ、どうなるかは明白だった。

「ぐああああああああああッ！？」

勝羅の身体に無数の石の破片が突き刺さる。『窒素防壁』を突き抜けてくるからその分速度が落ちるので、石の破片が身体を突き抜けることはない。そんな状況の中、咄嗟に上半身を倒しながら後ろに跳んだのは流石と言えよう。

それでも、勝羅の身体全体にダメージを与える。

大量の破片に吹き飛ばされた勝羅の身体が道路のフェンスに激突する。

「ん…ぐッ！」

この一方通行の攻撃を喰らつてもなお、意識がある勝羅。やはり、身体能力の高さが功をそつしたのだろう。

自分の身体を見てみる。

身体の至るところに石の破片が刺さり、刺さった場所から血が滲み出でている。

急所に刺さっていないのは、奇跡と言えよう。

自分の現状を確認した勝羅は、次に一方通行の方へと目を遣る。

一方通行は動く気配はない。

気絶したのか、と勝羅は推測をたてると、また視線を自分の身体に戻す。

（とりあえず、治療するか）

『素材構築』には、能力の応用の1つとして治療もある。

破れた血管や裂けた皮膚を構築することができる。血液の増幅も可能だ。

しかし、これには多大な集中力がいる。

たった数ミリにも満たない皮膚を構築し、またその上から
という感じで細かい作業をしなければならない。もし、構築する勝
羅の皮膚が人より厚ければ、構築した後で傷口に違和感が残り後々
に何かが起こるとも限らない。

血液の増幅もそうだ。増幅する血液の量が多過ぎれば、血管破裂な
んという大惨事にも成り兼ねない。

（かなり数があるな……浅いやつは残して、深いやつだけ治療し
とくか。石だけは全部抜いておこう）

勝羅の身体に刺さっている石の数が数十ヶ所とある。上半身はのけ
反らせたおかげで刺さった箇所が少ないが、もろに直撃を受けた足
には至る所から血が出ている。

深い傷を勝羅は1つ1つ治していく。

時間は30秒もかからないが、やはり多大な集中力を要する。

そして、5分後。

動ける程度には治し終わっていた。

「ふう～」

勝羅が一息つく。

「さてと……一方通行を治すか

勝羅は起き上がり、倒れている一方通行に近付く。やはり、一方通行は俯せの状態で気絶していた。

（そう言えば、一方通行に攻撃ができたのって、蹴りが1発と拳が1発の計2発だけか）

たつた2発で一方通行を倒してしまったのは、その2発がどれだけの威力を秘めていたのかが物語っている。

「外傷は……なしか。2発しか入れてないから当たり前か」

肋骨が折れていたが、これはすぐに治した。

普通は骨は皮膚や筋肉で見えないわけだが、『素材構築』のおかげで、素材とするものが目で見えていなくとも何となく感じることができる。おそらく、素材とするものに干渉するため、と勝羅は推測している。

さらに言えば、皮膚や血管を治すより骨を治す方が簡単だつたりする。

折れた骨は治したが、一方通行は目を開けない。

「このまま一方通行を置いていくわけにはいかないしな。仕方ない。病院に連れて行くか」

勝羅は気絶した一方通行の身体を背に乗せておんぶ状態になる。もちろん、チョーカー型電極の能力使用モードは切つてある。

あの方通行が誰かにおんぶしてもらうというかなりシユールな光景ができてしまったわけだが気にする必要はない。

「まずは『冥土歸し』のいる病院を探すか。一方通行を持つしていく
としたらあそこしかないわけだしな」

こつこつして、勝羅は一方通行を背負いながらビートにあるかもわからな
い病院を田舎して歩き始めた。

唯一不安要素があるとすれば、

（病院探してゐる間に起きるなよ。背中で起きたら、
攻撃されたり、防御も回避もできないからな）

当たり前である。

自分がおんぶ状態にいることを理解した一方通行がどんな行動に出
るかなど明白だ。

その後、勝羅が冷や汗を垂らしながら、一方通行の髪の毛を抜いた
のは余談である。

第5話 力と技（後書き）

能力使用モードの一方通行の髪の毛って抜けませんよね。

髪の毛を掴んで（ここから無理な気がしますが、そこは考
えないで下さい）引っ張ろうとすれば、木原神拳と同じで『反射』が発動して一方通行の頭皮に激痛が走ります。髪の毛は、引き抜こうとするベクトルが『反射』されますから抜けませんね。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

次回は、病院です。

第6話 病院

とある病院・診察室

「君は命知らずかい？彼を背負つて来るなんて驚いたよ？」

「ええ、おっしゃる通り……」

今、勝羅は『冥土歸し』と診察室で会っていた。

ここまで来ることに、どれだけの人に聞き回つたことか。聞いた人の中には、病院の方に電話しようか？、と気遣つてくれた人もいたが、勝羅は断つた。電話した病院が『冥土歸し』のいる病院とは限らないからだ。一方通行を『冥土歸し』に見せるのが、1番だと思ったからのこと。

結局、1時間近くの時間を要してしまつた。

しかし、今考えれば、さつさと病院に行つて『冥土歸し』の名前を出せばよかつたのではないだろうかと思う。『冥土歸し』という異名はその業界の中でも知らない者はいないはずだ。名前を出せば、その病院に連れてついてもらえたかもしれない。

自分の知恵のなさに落胆していると、勝羅の診察が始まった。

「それで？君はなぜ彼を背負つて来たんだい？」

そう聞いている間に、『冥土歸し』の手は診察を止めない。

「戦つたんですよ。いつから喧嘩を吹つかけたんですけど」

「じゃあ、君がここにいて、彼がベッドの上にいる、どこにいるか
君は勝つたってことかい？」

「もうここになりますね」

「これは本当に驚いたよ？」

『冥土帰し』が眼を丸くして言った。

「あ、そうだ。一方通行の電極に異常がないか見てやつて下さい。
けつこつ手荒に戦つてしまつたので、故障がないか心配です」

「君はなぜそのことを知つているんだい？彼が私の患者といつて
も知つていたみたいだしね？」

「たまたまですよ。他に知つているとすれば『冥土帰し』が学園都
市統括理事長の命の恩人とかですかね」

また眼を丸くする『冥土帰し』。

「そこまで知つているなんて驚きだよ？君は何者なんだい？」

「普通の学園都市の学生ですよ。まあ、人よりも多少はこの街のことを
を知つていますが」

それからも世間話をする勝羅と『冥土帰し』。診察するわざかな時
間の間だけだが。

「俺はこれで。あと、一方通行が目が覚めたら、この携帯番号に連

絡してくれ、と伝えて下さ。」

勝羅は『冥土帰し』に自分の携帯の電話番号が書いてある紙切れを渡す。

「いいのかい？これを渡したら、彼は負けず嫌いだから、また勝負を仕掛けるかもしれないよ？」

「結構です。勝負を仕掛けてくるなら、返り討ちにします。それに、この紙切れを渡すのは、単純に一方通行と連絡手段を取りたいだけですから」

「やつかい？君がそいつなら、構わないよ？」

『冥土帰し』はもう一つ紙切れを白衣のポケットに入れた。

とある病院・玄関ロビー

勝羅は病院の玄関ロビーを歩いていた。

昼時といつものあつて来る患者は少ない。周りを見渡しても、2人しかいない。

学生くらいの年代は勝羅しかいなかつた。

（とりあえず『冥土帰し』とも会えて、一方通行の髪は取れたからよし。これが成功するかは置いといて ）

「久しぶりにここに来たかもーー、つてミサカはミサカは高らかに宣言してみたりー！」

勝羅は聞き覚えのある声に、思考を一回中断して、玄関口に眼を向けた。そこには腰に手を当てて、ビシッと前方を指差している10代半ばの少女

打ち止めがいた。

（ここに打ち止めがいるのは、一方通行の見舞いが目的か？まあ、接触して損はないだろ）

とりあえず、勝羅は打ち止めに今の行動を注意することにした。本当は名前でも呼んで色々と話したいところだが、それはさすがに怪しまれてしまうため、自然に接触することにした。

「ひひ、ここは病院なんだから、静かにしないとダメだぞ」

「はーい、つてミサカはミサカは自分の行動を素直に反省してみる。というか、見ず知らずのあなたは誰？つてミサカはミサカは首を捻つてみたり」

「1週間に1回通院しなければならない身体の弱い人間さ。それで、君はここに何をしに？その元気な姿だと別に診察というわけではないみたいだけど。もしかして、誰かの見舞いかな？」

「そうなのつー！実はあの人人が入院したのを聞き付けたので見舞いに来たの！つてミサカはミサカはあなたの洞察力に驚きながら、おおざつぱに理由を説明してみる！」

「そつか。それは大変だな。じゃあ、早くその人のところの行かないよ。あ、俺の名前は那雲勝羅。君は？」

「打ち止めだよ、つて//サカは//サカは自分の名前を言つてみる」

「打ち止めね。また縁があつたら、また会おつ

」

ここで忘れてはいけない。

一方通行の見舞いに来た打ち止めが、どのような手段を用いて、マジックショーンからこの病院に来たことを。つまり、打ち止めには同行者がいる。

「もう、先に行くじゃんよ。一方通行に会いたいのはわかるけどあれ？その人は誰じゃん？」

その声に、ピシリと勝羅の口が止まった。

「うん？」

言葉が止まつた勝羅に打ち止めが首を傾ける。

勝羅は黄泉川の出現に冷や汗を垂らす。ギギギと視線を打ち止めから玄関から入つてくる黄泉川に向ける。

(黄泉川あーーツ！何であんたがこんなにいるんだよ！まだ学校にいる時間だろー)

内心で叫ぶ勝羅が知る由もないが、今日はテストの一科目で、自分の担当のクラスは終わった黄泉川は一方通行の入院を聞き付けて、マンションで騒いでいる打ち止めを車で拾い病院に来たということだった。

とにかく、勝羅は黄泉川が来たことに猛烈に不安を膨らんでいる。

「この人はなぐもという人なんだよ、つてミサカはミサカは説明してみる」

「ふうん、那雲ね。うちの子が世話になつたみたいじゃん」

「いえ、少し話していただけですので、世話なんてしません」

下手に回れば黄泉川に色々と尻尾を掴まされそうな気がする勝羅はどうやってこの状況を脱する方法を模索する。

しかし、そんな勝羅の努力を無駄となる。

「　　那雲、学校はどこじゃんよ？」

「は？」

突然の黄泉川の質問に、間抜けな声を出してしまつ勝羅。

すぐに、表情をポーカーフェイスに戻すと勝羅は答えた。

「なぜ、そんなことを聞くんですか？」

「特に理由はないじゃんよ。ただの勘じゃん。それとも、答えられ

ないじやんか？」

ニヤニヤと笑う黄泉川。

既に色々と追い詰められてくるような気がする勝羅は次の言葉を紡ぎ出す。

「いえ、そんなことはありませんよ。俺の母校は、長崎上機学園ですよ」

嘘もいとこりである。

「そりか。じゃあ、この病院に何しに来たじやんよ？」

「ただの通院です。もうこいでしょ、俺はこれで」

勝羅は黄泉川の追い抜くつとすると、打ち止めがいつのまにかいなくなっていた気付いた。

「黄泉川ー！なぐもがあの人を連れて来てくれたみたいだよーー、つてミサカはミサカは力いっぱいに叫んでみる！」

「打ち止めああーーーッ！－余計なことを黄泉川に言つてんじやなああーーー…………い？」

いつのまにかいなくなっていた打ち止めが受付の看護婦に聞いた情報を力いっぱい叫んだのに対して、勝羅は呼応するように叫んでしまった。

すぐに、叫ぶのを止めたが後の祭り。

もつ取り返しが付かない。

「ほほお、君は私のところの居候を運んだ上に、私の名前を知つて
いるときたじやんよ。さらに、この私を騙そつとしたじやん。そつ
きからよそよそしい態度は私が警備員と知つていたからじやん？」

「ハハハ……」

「ちょっと説明してもらおうじやん」

黄泉川の職務質問といつなの詰問が勝羅を襲つ。

第6話 病院（後書き）

打ち止めの口調で、本来は『-』や『?』の後は1文字空けるんですけど、そうすると変な感じがするので『、』で埋めてしましました。

ご了承下さい。

次回は、裏路地です。

第7話 路地裏の殺戮（前書き）

遅くなつて申し訳ありません。

2ヶ月ぶりの投稿です。

他の小説にてんてこ舞いで「ひらりを執筆する」ことができなかつたのです。

よろしければ、そちらの小説も読んで頂けると嬉しいな、という作者の願望です。

第7話 路地裏の殺戮

第一九学区・路地裏

第一九学区は他の区より発展が遅れ、寂れてしまつた学区だ。

そんな建物やがたくさんあり、不良たちのたまり場となつていて。不良の大部分は無能力者（レベル0）で武装無能力者集団と呼ばれる。

そんな溜まり場に、1人の少年がやつて來た。少年と言つても、小学校高学年とほとんど変わらない背丈だ。

カツンカツン、とその足音が裏路地の壁が反響して遠くまで響く。

「お～い、無能力者（レベル0）の皆さん。出でこいや～い。ボクと遊ぼ～」

そう叫びながら奥へと歩いていく。

端から見れば、小学生くらいの子供が武装無能力者集団に喧嘩を売つていいようにしか見えない。

「ああ、誰だ？俺たちにケンカを売つてきた奴は？」

「何だよ、ただのガキじやねえか」

建物の陰から金髪の男、と耳にピアスをしている男2人の不良が出てきた。

「本当に無能力者（レベル0）が出てきたよ。ねえねえ、ボクと遊ぼ～」

「は？……ギャハハハハハ！！おい、聞いたかよ？このガキ、俺たちと遊びてえんだとよ。世の中にはこんな馬鹿なガキもいるもんだよな！」

「ホントだよな！」

2人の不良は周りの不良たちも笑っていた。しかも馬鹿笑い。少年はその光景に溜め息をついていた。

金髪男の方が少年を上から見下ろしながら言った。

「それで、俺たちと何で遊ぼうってんだい？」

「チャンバラだよ」

「おーそうか。じゃあ、チャンバラは得物がないとな。俺たちは可愛らしいおもちゃしかないんだ。それでもいいかな？」

そう言つと、金髪男が懐から取り出したのはサバイバルナイフ。

「おーおー、それはマズくないか？相手は子供だぞ」

「心配ねえぞ。世の中の恐ろじたつものを教えるだけなんだからね！」

金髪男はサバイバルナイフの少年に向ける。

「それで、ガキの得物は何だ？」

「これだよー！」

少年が元気に取り出したのは、ナイフだった。柄がないただ銀色一色のナイフ。

それを見た2人の不良は、予想外の得物に出てきたことに一瞬驚いたが、すぐに笑い始めた。

少年はその姿にまた溜め息をつくと、おもむろに片手間にナイフを弄び始めた。

まるで、生き物ようにナイフが少年指の間にすり抜けた。

「そりそり、いいかな？」

そして、少年は無造作に手に持っていたナイフを金髪男に向かって投げた。ヒュと風を切る音とほぼ同時に、金髪男の肩にサクッと刺さった。刃の部分が8割方入っている。

もちろん、突然ナイフが刺さったことに金髪男はすぐに気付いた。

「Jの野郎！」

相棒がやられたせいか、ピアス男が少年を足蹴りを喰らわせようとする。その蹴りを見た少年は口元をニヤリとさせて、一步だけ後ろに跳んだ。

結果的に、ピアス男の蹴りは空中を切るだけになってしまった。

しかし、ピアス男は自分の蹴りが空振りしたことより、田の前で起きたことに田を疑つた。

「あ、消えたつーー？」

ピアス男の蹴りを避けるために一步だけ後ろに跳んだ少年が空中に溶け込むように消えてしまったのだ。

呆然とするピアス男に直ぐさま声が飛ぶ。

「馬鹿野郎！ ガキは能力者だ！ そのくらい分かりやがれ！」

「だつたら、どんな能力なんだよ！？」

金髪男の言葉にピアス男が落ち着くが、少年の能力が分からぬ以上、無能力者（レベル0）の自分たちには打つ手のしようがない。姿が見えるならまだしも、今は姿すら見えない。

「畜生…！」に行つた！

2人は首を動かして周りを警戒する。咄嗟のことに対応できるように戦闘態勢でだ。

「うわーみじめだなー」

地上から空中に踊り出た少年は両手に5本ずつ銀のナイフを携えていた。ニカツと笑うと、そのナイフを一気に投げた。下でキヨロキヨロしている不良たちに向かって

今月の第一七七支部の風紀委員は『ある事件』で悩まされていた。

「先月と今月を合わせて18件。犯人の手掛かりは、背丈が低い、能力者、ナイフを使う。たったこれだけですわ。これでは犯人の目星も付けられませんですの」

ジャッジメント
風紀委員の白井黒子と初春飾利の2人が事件の担当している。

その事件名は『無能力者狩り（ゼロ・ハント）』。

「特に無能力者（レベル0）を狙った事件。被害者のほとんどが武装無能力者集団。中には能力者もいたみたいですが、こちらは巻き込まれた、という形ですね。一般の方に被害が出てないのが幸いですね。でも、能力者が無能力者（レベル0）を襲うこの事件は、武装無能力者集団の活動が活発化する恐れがあります。早々に解決する必要がありますね」

初春が愛用のパソコンをカタカタとキーボードを押しながら話す。

「ところで、初春。今、あなたは何をやつてるのですの？」

「現場にある監視カメラの記録を一つ一つ確認しようかと思つてたところなんですが……どうやら、現場を直接撮っているカメラはないようですね。周囲のカメラに繋いで探してみます」

初春は初春で頑張っているようだ。

「じゃあ、こちらも現場写真でも見ながら少し考えてみますですの」

ソファーに座っている黒子は机に広がっている写真の山の一枚を取

つてみる。その写真には生々しい現場が写っていた。

写真に映っていたのは被害者の傷。顔や背中や腰など、身体のあらゆる部分に切り傷がついていた。

（よくもまあ、これだけの怪我をさせましたです。どれもこれも切り傷ばかり。傷は深いものもありましたが、浅いものがほとんど。死者が出てないだけ不幸中の幸いって言つたところですの。：：うつ、こんなもの長い時間見てたら今日の夕食が入つていかないですわ）

白井はしかめつらうな表情をして、持つていた写真をデスクに広がる写真の山に投げ捨てる。

「白井さん、白井さん。ちょっと来て下さい。気になる映像が」

「何ですか？」

黒子はソファーから立ち上がり、初春のパソコンを覗いてみる。初春はその映像の再生ボタンをクリックした。映像の内容は、1人の子供が裏路地に入つて行くところだけだった。初春がそこで一時停止のボタンを押す。

「これがどうかしましたのですの？」

黒子には初春の言いたいことがわからなかつた。

「白井さん、わからないんですか？この子が裏路地に入る時間はバツチリ犯行時刻に合うんですよ。しかも……」

ビデオがまた再生させられると画面には映らないが悲鳴と叫び声が

聞こえた。武装無能力者集団と思わしき声だ。

10分後、声が聞こえなくなるとまたさつきの子供が出てきた。その子供は画面の端から端へと消えていった。

「私はこの子が犯人ではないかと思つてゐるんです」

「確かに目撃証言と合致しますが、ちょっと証拠不足ですね」

「そうですか……。とりあえず、この映像の解析を進めてみます。顔が分かれれば、書庫パンクで調べられるかもしません」

「お願いしますわ」

また、それぞれの作業を始める。と言つても、黒子は事件の資料を見比べるだけである。

（被害者の数は43人。その中で能力者は3人。18件のうち10件は第一九学区ですわ。被害者の全員が切り傷を負わせられて意識不明。全くとんでもない事件ですね……）

そこで黒子は『あること』に気付いた。

18件の中で被害者の数は43人。そのうち能力者は3人。明らかに無能力者（レベル0）が多い。

いや、多過ぎではないか？

武装無能力者集団は、全員が全員無能力者（レベル0）で構成されているわけではない。『壁』にぶち当たり結果を伸ばせなくなつてしまい諦めてしまった能力者である低能力者（レベル1）や異能力者（レベル2）だつている。中には強能力者（レベル3）という強つわ能力者（レベル4）

者もいるわけだが、こちらは絶対数が圧倒的に少ない。

無能力者（レベル0）が大半占める武装無能力者集団に18件もの攻撃を仕掛けといて被害を受けた能力者はたったの3人。さらに、この3人は犯人に無能力者（レベル0）がやられているところへ助けに来たという形で巻き込まれて被害を受けている。つまり、犯人は最初から無能力者（レベル0）しか狙っていないとなる。

では、犯人は武装無能力者集団の中から無能力者（レベル0）と能力者を見分けているのか？

たまたま、この18件で標的となつた被害者が全員無能力者（レベル0）だつたのだろうか。その可能性がないとは言い切れないが、確率は低い。そもそも、無能力者（レベル0）と能力者をどうやって見分ける方法が分からぬ。特殊な機械を使うのか、超能力を使うのか。それすら分からぬ。

黒子は自分の中で出した考えにつーんと頭を悩ましていた。

第7話 路地裏の殺戮（後書き）

補足説明

少年の銀のナイフは、『家庭教師ヒットマンリボーン』のヴァリアーのベルフェゴールが使う銀のナイフだと想つてください。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

第8話 悪魔襲来（前書き）

連日投稿です。

ロンドン・イギリス清教の女子寮上空

『そいつ』は女子寮から遙か上空3000メートルのところにいた。月に照らされた身体は漆黒の色を強調し、背中から生えた翼は黒い羽根の一枚一枚が月光を反射し光っている。

「クククククツ。ようやく着いたぜ。この下からそれなりに強い力を感じる。この世界で言う聖人か。これ以外にもいくつか強い力を感じるが、時間がないからこいつがいつか」

凶悪な微笑を浮かべる『そいつ』は真下へと急降下を始めた。

ロンドン・イギリス清教の女子寮

世界で20人といない聖人の1人である神裂火織かんざき かおりは執務室で書類の整理をしていた。聖人である彼女は魔術師の排除や魔術結社の殲滅などの戦闘が本来の性分だが、毎日毎日そんな仕事があるわけがなく、今日は書類の整理という事務的な仕事を行っていた。

「ふうー」

今日のノルマを終わらせた神裂は息を吐きながら、椅子の背もたれに背中を預ける。聖人という性質のせいなのか、いくらか他人より

仕事が多いのは仕方ない。あとは、イギリス清教の傘下である天草式十字淵教の女教皇を務めているのも要因なのかもしれない。

「女教皇、仕事が終わりましたのなら、今日はもう寮の方でお休みになられてはどうですか？」

一緒に仕事をしている天草式の一人が神裂に言った。
神裂がいる部屋にはほとんどの天草式がいた。この場にいない天草式は他の仕事に駆り出されている。基本的に天草式は女教皇の下で仕事をしているのだ。

「いえ、もう少しあつていきますよ。やらなければいけない仕事はたくさんあるのですから」

ノルマが終わつたところで、控えている仕事はたくさんある。

「いえ、あとの仕事は私たちにお任せ下さい。女教皇は連日で討伐の任務に当たつていきましたから、今日くらいはゆっくりお休みを」

「そうですか？」

「そうです」

「分かりました。今日はこの辺で」

実際のところ、神裂にはあまり疲労感が溜まつていなかつたが、たまにはいいかな、と思いつの言葉に甘えることにした。

そこにいた天草式の全員は神裂がパタンヒドアを閉めて、廊下を歩いて行くのを確認すると、教皇代理の建宮斎示の所にダダダツと集まつた。

「最近の女教皇^{ブリエヌテス}、働きすぎじゃありませんか?」

「仕事に生きる女って感じなのよな。非常にマズい」

「だけど、理由は簡単。『想い人』に会えないからよ」

「だな。なんとかして、女教皇^{ブリエヌテス}を仕事から救つてやらなこと」

「でも、どうやってやるんですか? 実際、女教皇^{ブリエヌテス}は1日に私たちの3倍以上仕事をこなしているんですよ」

「セレ^{セレ}をなんとかしないとな。何かいい方法はないものか……」

天草式の夜はまだ長い。いろんな意味で。

女子寮に帰ってきた神裂はオルソラのつくつた美味しい夕食を堪能した後、自室に入った。腰に下げていた愛刀の七天七刀を壁に立て掛ける。

現在の時刻は午後9時。

寝る時間には少し早いが、特にすることもないので、神裂は明日に備えて寝ることにした。ベッドに入った瞬間、ビクッと自分の身体が震える。

「シスター・アンジェレネ、何をやっているんですか?」

ベッドの中に入ったのはアンジエレネだった。神裂は布団をおもいつきつめぐると神裂の足元で縮こまつているアンジエレネがいる。

「スースー、むこやむこや…………」

お氣に入りのクマのぬいぐるみを抱いて幸せな表情で寝ている。

「シスター・アンジエレネ！起きなさい！」

神裂はアンジエレネを起しそうとするが、むこやむこやと叫びだナで起きる気配が全くな。

「う～る～ひや～い～」

今、神裂はアンジエレネの肩を揺らして起しそうとしているので、アンジエレネの短い足でも届く距離にいる。

ドガツ……

アンジエレネのお子様特有の足蹴りが神裂の腹にヒットする。世界に20人といない聖人の神裂が1メートルくらい吹き飛んだ。

神裂は軽く咳込みながらも呼吸を整えて立つた。

「シスター・アンジエレネエエーーー！」

このとき、神裂の部屋が一瞬真っ暗になり、神裂の眼がギラギラ光り、髪が逆立つことは誰も知らない。

アンジエレネはビクツと大きく身体を震わせ、もくつと起き上がつ

た。

「……神裂ちゃん、どうしたの？何で私の部屋にいるの？」

「それはいつのセリフです。何故あなたがここにいるのですか」

アンジュ・レネはキョロキョロ部屋の中を見渡す。

「えへへ、また間違えちゃった。夜中にトイレに行くと部屋を間違えちゃうんだよね。この前はシエリーのところに行っちゃったんだよね。神裂ちゃん、何か怒つてません？」

自分の置かれた状況を理解したのか、恥ずかしそうに頭をポリポリとかきながら言った。

「早く出て行きなさああああい……」

「やれやれ。やつと行きましたか」

アンジュ・レネを元の部屋に返して、神裂がベッドに入り込むとしたとき、

ドガアアアアアアアアアアアンーーーーー

激しい爆音と共に神裂の部屋の天井が壊れた。いや、正確には何かが突き破つて来た。神裂は壁立て掛けである七天七刀を取ると、いつでも抜刀できる構えを取る。

「何者ですか」

神裂は砂煙で良く見えないが、この中に誰かがいることは確信していた。

天井の穴から風が入り込んだのか砂煙が揺らぐ。そのとき神裂の目が黒い影を捕えた。

ヒュン、と七天七刀が風を切り、横からの刃が黒い影を襲う。

だが、ガギンッ！とその刃は止められる。

「 ッ！？」

神裂の振るう刃が止められた。聖人の力で刀を振っているにも関わらず。神裂は刀を戻そうとするが、ピクリとも動かない。

（止められたんじゃない、何かに掴まれている…）

砂煙が少しずつ晴れ、黒い影の正体が分かる。

「 悪魔…… ッ！？」

神裂の目に飛び込んで来たのは、その黒い影は悪魔と言える姿をした者だった。

「ヒヒヒヒヒッ。アンタは聖人だな。あなたの身体をもう一に来た
ぜ」

『そいつ』は七天七刀を片手で掴みながら話す。さつきから引っ張つたり、押したりするがピクリとも動かない。聖人の腕力は普通の人間の数十倍にもなる。それを片手一本で押されたのだ。それでも諦めない神裂は刀を奪還するために、聖人の身体能力をフルに活用した高速の蹴りを放つ。鉄筋コンクリートのビルだろうが簡単に壊すほどの威力を持つ蹴りだ。人間に向かって、尚且つ部屋の中でも放つ蹴りではないが、神裂の本能がそこまでしないと敵わないと判断した。

しかし、その渾身の蹴りも『そいつ』のもう片方の手によつて止められる。いや、掴まれる。後退しようにも足を掴まれているため身動きができない。

「そんなに暴れるなよ。すぐに、楽になるって

神裂の足を掴む手の握力が増す。それは、神裂の足を潰すほどに。

「ぐあうッ！－！」

「おつと、これは力を入れ過ぎたか。これから使う身体だから大切に扱わないとな」

故意にやつているようにしか聞こえない。

「な、何ですか！あなたは！」

「俺か？俺は悪魔ザガーグゾーバル。」

「悪魔!? まさか、誰かが悪魔堕し（デビルフォール）でもしたんですか！？」

「悪魔墮し（デビルフォール）？」の世界にはそんな面白い魔術があるのかよ」

「眞面目してこらぬのせうじがめだよ。答えてトモヤニ。」

「ああ、うるせえな。人間風情が俺に盾突くんじゃねえよ！」

۱۰۰

「もう話は終わりだ。いつちは時間がないからな」

ザーガが眼を見開くと、神裂の眼が血のよつたな真紅に染まつていつた。

第8話 悪魔襲来（後書き）

神裂がキレやすくなつてるのは気にならないで下さい。書いてたら、そつなつちやつたんですね（＾＾；

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7150s/>

Exorcist～悪魔と戦う者～

2011年10月9日01時02分発行